機動戦士ガンダム Gジェネレーション(仮題)

北野ミスティア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦いの中で散った戦士の魂。
そしてそれを拾い上げる者。
死者の戦いは、ジェネレーションシステムの中へ。

（試験投稿です。好評そうなら続きます）

目次

I．魂の生還 ―― 1
II．その名はガンダム ―― 16
III．宇宙と地球と ―― 32
World―I Cosmic Era
I．砂漠に輝く星 ―― 47
II．醒めぬ剣 ―― 62

Ⅰ・魂の生還

人はなぜ戦うのか、と問われたとき、何と答えたものだろうか。

いつだろうか、人が戦いを始めるようになったのは。

人は、この大宇宙の中では小さな一つの種でしかないはずなのに。

なぜ、人は戦いで、自らの世界を滅ぼそうとするのだろうか。

人が猿から進化して、自らの足でこの大地に立った時、すでにその運命は決まっていたのかもしれない。

頭脳を持ちえたからこそ、他より優れていることを望み。

文明を持ちえたからこそ、飽くなき欲望のままに、自らの世界を広げることを望み。

知能を持ちえたからこそ、自らが自らの正当性を証明したがり。

理性を持ちえたからこそ、その手で他の命をたやすく奪うことができ。

記憶を持ちえたからこそ、過去の過ちを知り、なお繰り返し。

人が人という存在である限り、戦いから逃れられることはできないのだと。

そして、人は戦いという愚行を繰り返すことで、歴史を重ね、その先に再び、戦いの火が灯る。

ならば、戦い無き世界という理想のため、この世界から戦いをなくすため。

人類の歴史を、この手で変えてやろうではないか。

ヒトという愚かな生き物は、自らという種が途絶えなくば、戦いを捨てることはできないのだ。

◇　◇　◇

目が覚めたとき、自分が覚えている天井とは、その部屋は明らかに違っていた。

今まで負傷して病院送りになったことがないと言えば嘘になる。誰だって怪我を乗り越えてエースになってきたようなものだ。

だが、今そのようなことを、自分の頭はさっぱり考えていなかった。何より、今自分が置かれた状況がさっぱり理解できなかったからだ。

くどいようだが、今覚醒した自分が目線の先に見つめていた天井は、少なくとも自分の覚えているどの天井でもなかった。そもそも自分は、先ほどまで漆黒の宇宙にいたはずではなかったか。

まだ半分ぼやける頭を無理やり動かし、それまでの状況と今の状況を、脳内でどうにかして辻褄を合わせようと試みる。

両手を動かし、自分の手を見つめてみる。指は十本ちゃんと揃っていた。同時に、おぼろげながら、つい数分前のことであったかのように、操縦桿を握っていた感触がよみがえる。

記憶がうっすらとよみがえってくる。自分は……俺は、故郷のため、国の勝利のため、機動兵器のパイロットだったはずだ。人型機動兵器モビルスーツのパイロットだったはずだ。

そうだ、俺の、名前は――――。

「目が覚めましたか、ジョニー・ライデン」
名前を呼ばれ、声の方向を向くと、そこには一人の女が立っていた。見た目は自分とそう年齢が違わないであろう、若い女性士官だった。切れ長の目に、整った細い顔立ち。凛としたその立ち姿に似合わない紺色の長髪を腰近くまで伸ばしている。
しかし、着用しているペールのアンダースーツとグレーの上着という制服は、既視感を覚えこそしたが、自分が知っている何処の隊の制服とも違っていた。
「あんたは……」
「貴方はア・バオア・クー宙域で機体を撃墜され、ここに運び込まれました。身体の調子はどうですか？」
名前を聞いたつもりだったが、返ってきたのは半ば一方的な説明の言葉だった。
「……なんとか、五体満足ってことだけは、たった今把握したところだ」
「そうですか。それならば、数日もあればまたモビルスーツに搭乗できるでしょう――――」
喜ばしさを伝える言葉ではあったが、彼女の顔には喜びの表情は浮かんでいなかった。その次に彼女の口から出てきた言葉に、俺は耳を疑うことになった。
「もっとも『真紅の稲妻』としてではなく『ジョニー・ライデン』という、名もなき戦士として、ですが」
「……なんだと？」
その言葉に、俺は間抜けにも聞き返していた。その言葉では、まるで俺の二つ名『真紅の稲妻』を捨てることになると言っているようなものじゃないか。
「……意識を取り戻したばかりのあなたには少々辛いことかもしれませんが、伝えなければならないことがあります」
彼女はそう言って、ベッドの横にあった椅子に座った。切れ長の目から見える瞳は、美しいアメジスト色だった。

「っと、まだ自己紹介をしていませんでしたね。私はニキ・テイラー。この戦艦『キャリー・ベース』の副長を務めています。以後お見知りおきを」

◇　◇　◇

「……そうか、やはり、公国は……」

ニキの話を聞き終わったとき、ジョニーの胸には、不思議と悔しさは浮かんでくることはなかった。かわりに浮かんできたのは、安堵にも似た空虚感だった。

ジョニーに対し、ニキは淡々と語った。

彼がすでにＭＩＡ認定され軍籍抹消されたこと、功績に対して永世中佐の階級を与えられたこと、そして、ジオン公国が一年戦争に敗北したこと。

自分はジオンという国の最後の砦、ア・バオア・クーという宇宙要塞を守るため出撃し、そこで乗機を破壊され、戦火またたく宇宙の闇を漂っていた。瀕死の重傷を負っていた彼を、偶然にも近くを通りがかったこの戦艦『キャリー・ベース』のメンバーが発見し、母艦へ収容したというわけだ。

ジョニーはその、今はまだ顔を知らない命の恩人に心の中で感謝したが、胸中は複雑だった。

「貴方が消息不明になったその日、ア・バオア・クーは陥落しました。翌日、終戦協定が結ばれ、共和国制となり、ザビ家に与していたものは国政から排除されたのです」

「ああ……しかし、それとあんたたちが俺を助けたことに、いったい何の関係があるっていうんだ？」

ずっと聞きたかった疑問を、ジョニーはぶつけた。状況から見れば、故国が戦争に敗れ、エースとしても泥まみれとなった自分を彼らが助ける意味は一見して皆無に思えたからだった。

「貴方はすでに、歴史の上では死んだ人間です。そのほうが、私たちに

とっては都合がいい。むしろ、そういった『忘れ去られた人間』でなければ、引き入れられないのです」
「死んだことになってる人間のほうが都合がいい……あんたがた、何者なんだ？　連邦でもジオンでもないのか？」
「それはいずれご説明しますが、どちらでもないというのは肯定しましょう」
　ニキの言い方にはわずかに含みがあったが、ここで詮索したところで、まず返答はもらえないだろうとジョニーは思った。
「まあ、今日のところはごゆっくりお休みになったほうが良いでしょう。まずは貴方に引き合わせたい人物がいます。この艦のクルーも、まだ紹介していませんし、貴方も命の恩人の顔を、一度くらい見ておく必要があるでしょうから」
「あ、ああ……」
　柄にもなく、ジョニーは戸惑っていた。ジオン軍人に、ここまでクールな物言いをする女性士官はいなかった。軍人という境遇においては何処まで行っても徹底的な男社会で、出会った女性軍人など数えるほどしかいなかったからだ。
「では、私はこれで。何かあれば、備え付けのコールボタンで呼び出してください。ブリッジに直接つながります」
　ニキが指さした先には、確かにそれらしきコンソールがついたパネルがあった。しかし、それを見てジョニーが再度彼女の方を振り返ったときには、彼女はもう出ていこうとしていくところだった。
「……あんたは、何処の人間なんだ？　コロニーか？　それとも地球か？」
　ジョニーは思わず引き留めるかの如く、そんな言葉を発した。
「……どちらでもない、とだけ言っておきましょう。いずれわかる時が来ます」
　ニキは少しの間をおいてそれだけ言い、そのまま扉の向こうへ消えた。答える直前、彼女の瞳がわずかに下を向いたことに、ジョニーは気づくことはなかった。

◇　◇　◇

翌日、ジョニーはニキの案内で、ブリッジにつながる通路を歩いていた。とはいえ、重力はないので地に足はついていなかったが。しかし、時折窓から見える外の風景は、漆黒ばかりで星は見えず、宇宙であるのかすらわからない空間だった。

あまつさえ、このキャリー・ベースという艦の構造自体、少なくともジョニーが馴染み深いジオンの艦艇のどれとも違うものであることだけは確かだった。どちらかというと、わずかに見覚えがあったが自らの敵であった地球連邦軍の艦艇のほうが構造的に似ていた。

聞きたいことは山ほどあったが、ニキが纏うその雰囲気のせいで、ジョニーはとても彼女に質問することはできそうになかった。任務に真摯、それでいてクールで近寄りがたい、ジョニーが彼女から感じたのはそんな雰囲気であった。

「こちらがブリッジです」

気づけば目的地にはあっという間についていた。それなりに大きな艦であるはずだが、意識を別のところに向けていたジョニーには一瞬のことのように感じられた。

古いエアー式の扉をくぐった先には、見慣れない、それでいてどこか懐かしくもある光景が広がっていた。艦の中で最も広く、それでいて最も緊張する場所、ジョニーにとって艦橋とはそういうものであった。

「待ちわびたぞ、ジョニー・ライデン」

上から降ってきた男の声。見上げると、その艦長席と思わしき場所には、老齢の紳士が座してこちらを見下ろしていた。年齢はジョニーの軽く倍以上はあるだろう。その顔に刻まれた皺には、しかし多くの戦いの傷跡が混じっていることを、ジョニーが気付かないはずもなく。

「あらためて、ライデン少佐……いや、一人の戦士、ジョニー・ライデン」

男はゆっくりと席から立ち上がり、彼の前にふわりと降り立った。

「儂はゼノン・ティーゲル。この隊のキャプテンを務めさせてもらっている」
ゼノンと名乗ったその紳士は、鋭い目つきとは似つかわしくない柔らかな笑みをその口元に浮かべ、右手を差し出した。
「ジョニー・ライデン、ようこそ、キャリー・ベースへ。我々は、君の復帰と加入を心より歓迎する」

差し出された手に、一瞬の沈黙の後、ジョニーはおずおずとそれを握り返す。手の平に触れたその感触は、ジョニーがよく知っている、間違いない歴戦の勇士のものであった。
「……ひとつ、教えてくれないか」
ジョニーの口から出たのは、そんな疑問の言葉だった。今まで聞く機会を逃していたその疑問を、ジョニーはここで口にする。
「何だね？」
「あんたたちは、俺の力を必要とする理由があると聞いた。それは、正義なのか？　それとも悪なのか？」
ゼノンは一瞬神妙な面持ちになったが、彼が口にした言葉は驚くほど簡潔で、そして意外なものであった。
「今は信じられんかもしれんが、儂らは世界のために行動している。お前の世界だけではなく、もっと多くの、数限りなく存在する世界をな」
「……」
「正義か悪か、と聞かれれば、それは時と場合によるな。世界を救うために、必要悪という存在にならねばならんこともあるだろう……君は、元の世界ではもうすでに死んでしまった人間かもしれん。だが、儂らは今、この瞬間にも、一人でも多くの戦士の力が必要なのだ」
そう言い切るゼノンの目には、未来を憂う、確固たる意志が静かに燃えているようにも見えた。
「だからこそ、あえて言おう。ともに戦ってはくれないか、ジョニー・ライデン」

「……」
何と答えたものか、言葉を紡げないでいたジョニーの背後から、その時、突然男の声がした。
「ジオンとして戦えるかどうかではない、彼らは戦士としての誇りが残っているかと聞いているのだよ」
そこにいたのは、短く刈り上げられた髪に、濃いひげを口の周りいっぱいに蓄えた男であった。そして、その男の異名を、ジョニーはいやというほど知っていた。
「あんたは……!!」
「久しいな、真紅の稲妻」
その別名を、ソロモンの白狼。そんな異名をとり、その名の通り全身を白く塗装された専用機に乗り、まるで狼のように戦場を駆け、多くの敵を屠った、エースと呼ばれた男。
「シン・マツナガ大尉……!!」

「意外な再会といったところか、ジョニー・ライデン少佐」
「……あんたも、この艦に拾われたのか」
「ああ、この通り、ようやく満身創痍の傷から立ち直りかけてきたところだ」
マツナガの手や足には、ところどころまだ包帯がまかれていた。ジョニーは、彼の名前こそよく知っていたが、一大決戦を前に本国へ呼び戻されたというところまで噂で聞いていたものの、そのあとの行方はわからないままだった。
「……あんたは、協力することにしたのか」
「そうだな、私も最初は戸惑った。命を救われたことは感謝すべきだが、いきなり同胞に加わらないかと言われれば、貴官のような反応は至極当然のことだろう」
いぶかしむようなジョニーの質問にも、マツナガは真剣なまなざしを崩さなかった。

「……理由があって、協力するんじゃないのか、あんたは」
ジョニーは眉間にしわを寄せたが、マツナガはフッと笑って答える。
「元の世界ではすでに死んだも同然だと言われて、落胆するわけがないといえば、それは嘘になるだろう。だが、戦士としての誇りがまだ残っている限り、この身が必要とされることがあるなら、私は戦う。マツナガの名にかけて、人のためになることをする。その矜持を汚すことだけはできぬからな。理由とするなら、それで十分だ」
マツナガの表情は笑っていたが、その目には真剣な戦士としての炎がまだ燻っていた。それは紛れもなく、ソロモンの白狼として名をはせた男のものに相違ないことを、ジョニーの戦士としての感覚が告げていた。
「……戦士として、国を救うことはできなかったし、もうできないやもしれぬ。だが、救うべきものがどこかにあるのなら、戦士として見ぬふりをするわけにはいかぬのだ。戦場で掲げた、白き狼を裏切ることはできない」
マツナガの心はすでに決まっていた。ジョニーは、自分が知る以上の消息を聞きたくもあったが、それはまた別の時に聞くことができると思い直した。
「……世界を救う、か……」
「……そのうえで聞こう。戦士として、貴官はその胸に弱者を救うという意志と誇りはまだ持っているか」
「……」
ジョニーは空を仰ぐように、天井を見上げた。
「……俺だって、単騎で戦況を変えられると思っているほど自惚れちゃいない……そう思ってたんだが……な」
見慣れていた星空が見えるわけはなかったが、そこには何かがあるような気がした。
ジオンの戦士としてのジョニーはすでに死んだ。しかし、ジョニー・ライデンという戦士は今、ここに確かに在るのだ。
戦士という肩書きが、まだこの世界でなすべきこと、なせることが

ある、そう告げているような気がした。

「……俺に、力になれることがあるのなら……わかった、やってみせようじゃないか」

ジョニーの瞳に、消えかけていた戦士としての炎がわずかに戻った瞬間だった。そして、ブリッジ内にいた数名のクルーから拍手が起こった。ジョニーは次々と自己紹介とともに握手を求められる。

「操舵士のエルンスト・イェーガーだ。ま、一蓮托生ってことで、よろしくな」

「同じく、通信士のラ・ミラ・ルナです。あなたと共に戦えること、うれしく思います」

操舵席にいたシニカルな印象の男、そして、通信士席にいた生真面目な印象の女性。どちらも聞き覚えのあるジオン訛りの言葉ではなく、顔だちを見てもコロニー育ちの人間ではないようだった。

そして、その拍手の中に、今までブリッジにいなかった者が、それも二人ほど混ざっていることに、ジョニーは気が付いた。

振り返ると、そこにはふたりの男女。これまた、ジオン(ふるさと)では見たことのない顔立ちの人間だった。一人は漆黒のボディースーツを身にまとった長身で細身な顔立ちの男。もうひとりは金髪で大きなエメラルドの瞳を持つ女だった。たったいまモビルスーツから降りたばかりなのか、青紫を基調としたパイロットスーツを身につけていた。

「ジョニー・ライデン、お初にお目にかかる。俺はマーク・ギルダー。この艦のモビルスーツパイロットだ」

「同じく、パイロットのエリス・クロードです。改めて、よろしくお願いします、ジョニー・ライデン」

握手を交わし、しかしながら状況を半分くらいしか呑み込めずにいたジョニーに、ゼノンが声をかけた。

「モビルスーツの関係については、彼らとメカニッククルーから聞いてくれ。三日後には、最初のミッションを開始せねばならないのでな」

「三日後？」

また急な話だな、とジョニーは思わず眉間にしわを寄せる。が、ゼノンの次の言葉で、そのしわはすぐに消えた。
「怪我人使いが荒くてすまんな。むろん、それまでに、君のモビルスーツの整備は完了させる」
「ゲルググが!? 三日で使えるようになるってのか!?」
自分の記憶が確かなら、自分のモビルスーツはあの時、原形をとどめないほどに大破したのではなかったのか、とジョニーは思わずにいられなかった。満身創痍で、おぼろげな意識の中での記憶だったので、間違いはあるかもしれないが。
「無論だよ、この艦のメカニックは優秀だからな。当然、シン・マツナガ、君の機体もすぐに出撃できるよう手配するとも」
「なんと……!!」
さすがのマツナガもこれには驚いた様子だった。
「そのあたりのからくりも、後々メカニックから説明してもらうとして、とりあえずは三日間、十分に英気を養ってくれ。三日後には、君たちはまた、戦いのさなかに飛び込まねばならなくなるからな」
ゼノンはそう言って艦長席に戻る。入れかわりに、エリスが声をかけてきた。
「では、お二人とも、格納庫にご案内します」

◇　◇　◇

「答える手間を増やすようで悪いんだが、聞いていいか？」
格納庫への通路の途中、ジョニーが口を開く。
「何でしょうか？」
「この艦は、連邦のものか？」
「……そうですね……半分はそうで、半分はそうではない、というべきでしょうか」
エリスは少々戸惑いながらも、そう答えた。
「どういう意味だ？」
「……それを説明するには、俺たちの立ち位置も説明しなけりゃなら

ないんだが、いいか？」
　萎縮気味のエリスにマークが助け舟を出した。
　マークの口から語られたのは、にわかには信じがたい事実ばかりだった。

　この艦は、いわば、世界を渡り歩く艦。
　全ての世界は『ジェネレーション・システム』という統合型管理システムによってその存在を管理されており、時折それらの世界で起こる争いを解決するのがこの艦の仕事であること。
　そのシステムには、過去、未来、すべての世界の結末や出来事が記録されており、この艦にも限定的ながらアクセスする権利があること。
　アクセスすることによって、その時代の兵器や人々をある程度自由に手元に置くことができること。
　そして、今、このシステムが何らかの異常をきたし、本来とは異なる歴史をたどっている世界が多数あること。

「俺たちがやっているのは、言ってしまえば歴史の改変に他ならない。だからこそ、なるべく世界の基礎データ、と言えばいいのか、人や物にはあまり手を付けたくないのさ」
「……なるほど、だから俺たちみたいな、元の世界ではとっくに死人同然の人間を連れてきたってわけか」
　納得した様子のジョニー。
「ええ、乱暴な言い方ですが、正しい歴史の流れによってその世界で消えた人間なら、たとえ生き残っていたとしても、歴史に与える影響は少なくてすみますから」
「ふむ……逆に言えば、我々は、この先、元の世界に戻ることはない……いや、出来ない、という解釈で良いのか？」
　マツナガは、目線はエリスの方に向けず、しかして言葉で刺して感触を確かめるような口ぶりで聞き返した。
「……ええ、極端な話をすればそういうことです」

「……」
元の世界には帰れない。
予想していたこととはいえ、その事実を改めて聞くとジョニーもマツナガも、その言葉の重さに気が重くならざるを得なかった。自分たちは今こうして五体満足で生きながらえているにもかかわらず、元の世界ではとうに死んだか行方不明となった人間であり、今さら戻ることもできないのだ。
「この艦、キャリー・ベースも、宇宙籍０１００年代に使われていた地球連邦軍のクラップ級という戦艦を改造した練習艦を基本にしたものです。ベースがこの型の戦艦になったのも、単にそこに歴史から消えつつ残っていても問題のない戦艦があったから、というだけに過ぎません」
「……なるほど、戦士が死人同然なら、メカも死人同然ってわけか……まるでゾンビ集団だな」
「ああ、よく言われるよ」
ジョニーが苦笑いとともに言い、マークも肩をすくめた。
「……それで、戦いが終われば俺たちはどうなる？　別の世界で、名前を偽って暮らす、っていう選択肢でもあるってのかい？」
思い出したようにジョニーが聞いた。
「ないわけじゃないが、できるかどうかは時と場合によるだろう。元の世界にいなかった人間を新しくそこに放り込むのも、それはそれで影響はゼロじゃない」
マークがそう答えた。
ならば自分たちはこのまま、世界を渡り歩く時空の放浪者にでもなるのか。さすがにこれ以上問いただすのはジョニーにも憚られた。ならば何を聞いたものかと考えたが、幸いにも、それを思いつく前に、一行は目的地に到着していた。
「到着しました」
エリスの案内で足を踏み入れたそこは、ややこじんまりとはしていたが、機動兵器部隊を二個小隊ほど運用するのに十分な広さのある格納庫だった。彼らがジオンにいたときに見たものとは違っていたが、

整備に必要な道具や機器は、それらしきものが一通りあるようだった。
　ハンガーには数機のモビルスーツが係留され整備を受けていたが、メカニックスタッフはこぢんまりとした格納庫であることを加味しても明らかに人数が少ないように思えた。
「……やけに静かだな」
「ええ、この艦に残っているメカニックスタッフは、今のところ６名です」
「なんと……それだけの人数でこの整備を回しているとは。これは素直に称賛せざるを得んな」
　感嘆のような溜息とともに称賛の意を示すマツナガ。
「そして、あそこにいるのが、この艦のメカニックチーフのケイ・ニムロッドです」
「……ん？　ああ、あんたがたがジオンってとこのパイロットさん方か」
　そこにいたのは、おおよそメカニックには似つかわしくない、金髪で頬にそばかすを付けた、腕っ節の強そうな女性だった。
「紹介に預かったケイ・ニムロッド。この艦のメカニックだよ」
　かぶっているキャップのつばをクイっと持ち上げて彼女は言った。
「驚いたぜ……ジオンじゃ女のメカニックなんて見たことがなかったからな……」
「フン、何度も言われてるよ、そんな台詞」
　ジョニーの言葉に対し、もはや慣れっこだというようなケイの口調には、どことなく諦観のようなニュアンスも感じて取れた。
「ところで、例の機構、解析は進んでるのか？」
「いいや、まったく。外部からのアクセスもさっぱり受け付けやしない。つまるところ、あいつは完全なブラックボックスってやつさ」
　ケイが肩をすくめて反対を見上げ、それにつられてジョニーとマツナガもその視線の先を見、そして思わず目を丸くした。
「これは……!!」

二人はその機動兵器モビルスーツに見覚えがあった。

ふたりの記憶にあるそれと細部は違っていたが、輝きを放つＶ字型のブレードアンテナ、鋭い目つきのツインアイ、一切の無駄を排除したボディ構築、そして何より、白をメインカラーとしたその機体色。

それを見たとき、二人は同時に言葉を漏らしていた。そしてそれこそ、この機体の名前。

『――ガンダム……!!』

II．その名はガンダム

「ああ、あんたがたは、このモビルスーツの名前を知ってるんだったね」
　ケイは笑いながら二人に声をかけた。
「こいつの名前はフェニックス。まあお察しの通り、ガンダムと呼ばれる特徴も、持っちゃいるけどね」
　フェニックス。不死鳥。
　なるほど言われてみれば、目の覚めるような赤色、まるで鳥類の頭のような流線型の頭部、肩部から流れるようにつながる四対の羽のようなウイングなど、見た目は確かに神話にうたわれる不死鳥のようだった。
「開発部門のチームが、キャリー・ベースの万が一の防衛用に、ジェネレーション・システムから様々な機体のスペックデータをもとにして開発した、この艦の直擁機さ」
「へえ、つまりあんたたちが一から造ったガンダムってわけか」
「ええ。さっき話した通り、このチームの特性上、機体をすぐに調達できるとは限りませんし、時間もかかります。ですから、どの歴史の時間軸にも存在せず、なおかつどの世界へも実践投入できる機体、それがフェニックスというわけです」
　エリスが説明する。
「まあ、そういうわけさ。ただ、あまりに開発データを混ぜ込みすぎたせいなのか、ＯＳを組み上げたとき、システム内に謎のブラックボックスが出来ちまってね」
　ケイはため息交じりにそう言った。
「昨日から何度もその解析を試みちゃいるんだが、ＯＳ自身がアクセスを受け付けやしない。『戦闘データ不足』っていうエラーメッセージが返ってくるだけさ。まあこの機体自身まだ一度も実戦には使っていないんだけどねえ」
「まああと三日あるんだ。解析できればよし、そうならなくても、最低限の活躍はできるように、武装の整備は進めておかないとな。頼んだ

ぜ、ケイ」
「あいよ。アタシにもメカニックとしての意地があるからね。使い物になるようにしてみせるよ」
　マークの頼みにも、ケイはニッと笑って頷いた。
「ただ、ブラックボックスの解析ができないとなると、信用性の問題になっちまうから追加生産は当分見合わせなきゃならないねえ」
「ええ……とりあえず、この1号機はマークに任せるとしても、2号機からの配備には時間がかかりそうですね」
　目の前の状況に、エリスは難しい顔になってしまう。
「ああ、エリスには苦労を掛けることになるけど、こっちも何とかできるように、方法を考えてみるさね」
「はい、宜しくお願いします」
　それだけ言うと、ケイは元の仕事に戻っていった。
「随分と腕の立つメカニックだな」
「ええ、彼女の技術は我々の生命線です。いざとなれば、ケイ一人でもこの艦のメカニックの仕事をすべて賄えるくらいのテクニックは持っていますから」
「ふむ、これは我々のモビルスーツの仕上がりにも期待を持ってしまうというものだな」
「そちらはご心配なく。元のもの以上の仕上がりになりますよ。お望みであれば、追加武装の装備も承りますから、何なりとケイに伝えておいてください」
「……断られやしないのか、それは？」
　ジョニーが思わず心配の言葉を発したが、それを笑ってマークが否定した。
「いや、それはないだろうさ。あいつは遊んでる男は大嫌いだが、メカいじりは大好きだからな。仕事が増えても、小言を言いこそすれ、断ることは絶対にない。他のメカニックマンも、そんなケイを信頼してついて来てるからな」
「なるほどな。気が向いたら頼みに行ってみるとするか」
「意外だな、私も貴官と同じ感想を抱いたよ」

ジョニーもマツナガも乗り気であった。
「ところで、さっきメカニックの人数が今のところ6名と言ったが、平時はもっといるのか？」
「え、はい、いつもならこの倍以上のメカニックがこの艦にいますが？」
思い出したように飛んできたジョニーからの質問に、エリスは思わずぽかんとしてしまった。
「そいつらはどうして今ここにはいないんだ？」
「ああ、もうすでに気づいてると思うが、この艦に搭載できるモビルスーツは2個小隊分だ。が、今はもう片方の隊が別行動中でな。メカニックも半分そっちに回してるってわけだ」
「モビルスーツの手配はどうしているのかね？　この組織の規模では、モビルスーツをそうそう調達できるとも思えないのだが」
続いてマツナガの質問も飛ぶ。
「基本的には現地調達ですが、各部隊に1機だけ、リーダー用の機体としてこれを配備しています」
エリスはフェニックスの隣にあった機体を指差した。
「……へえ」
「……ほう」
それを見た二人は、思わず感嘆にも似た声を漏らした、なぜなら、そこにはまたしてもツインアイとV字アンテナを持つ人型機動兵器『ガンダム』がいたからだ。
全体的にダークブルーを基調として、機体のところどころに赤と黄色と白を配した、所謂トリコロールカラーをまとっており、額のV字アンテナは左右の中央から端が天を突くように真上に伸びている。バックパックには対となった姿勢制御用と思われるフィンがある。
「この機体の名はトルネード。過去に我々が別の世界に出向いた時に、すでに廃墟となった軍需工場の格納庫に放棄されていたものを偶然発見したのです」
「しかも、それも1機だけじゃない、４機もだ」
二人の説明に、ジョニーもマツナガも目を丸くした。

「なんと。ではどこかで、あの機体が数限りなく跋扈していることが現実にあったというのか」
　二人はある種の恐怖のようなものを隠せなかった。
　二人が知る『ガンダム』というものは、今見たものと姿かたちは多少なりとも違えど、火器を受け付けぬ堅硬な装甲に、戦艦の火砲を凝縮したような火力と、目で追うのがやっとなほどの機動性を兼ね備え、たった1機で不利な戦況をいとも簡単に覆しうる。そんなものであったからだ。
『白い悪魔』『連邦の白い奴』『白き流星』。
　その機体と相対したジオン兵は皆それをそう呼び、相対したことのないジオン兵の間でも恐怖と憎悪を込めてそれがそう呼ばれていたことを、二人はよく知っていた。
　そんな機体が複数、隊をなして襲い来る。二人は考えるだけでも背筋に悪寒が走りそうだった。
「性能も悪くなかったんでな、リーダー機として各部隊に1機ずつ配備してる。だから今ここにあるのは、俺たちの隊のってわけだ」
「それに、最悪現地調達ができなくても、時間はかかりますが、あれを使えば一から機体を組み上げることもできないわけではありません。もっとも、その機体の系列に連なる他の機体のデータがあれば、もっと手っ取り早くできますけれど」
　そういってエリスが視線を向けた先には、白く大きな直方体の形をした何かが鎮座していた。横幅がモビルスーツ1機分ほどもあり、時折中から機械のメカニカルな動作音と、金属がぶつかり合うような音が聞こえてくる。
「こいつは？」
「ジェネレーションシステムとリンクしたビルドマシーンです。システムとリンクさせることで、データベースに蓄積されているモビルスーツのスペックデータをもとに、ほぼ同じ機能を持った同型機を作り上げることができる装置です」
「凄いな……しかし、あんたたちの状況を見るに、こいつがあれば何でもすぐ完成できるってわけじゃないんだな？」

「ああ、アクセスできるとはいっても、閲覧可能なのは機体のほんの外回りの情報にしかすぎない。それにジェネレーションシステムは、その時代が進めば進むほど、情報のプロテクトが強固になっているからな。戦争末期に開発された高性能な機体なんかになると、手に入れるのはそう簡単ではない、ということさ」
「もっとも、そういう意味では、今回お二人の機体の情報をこちらが手に入れられたことは幸運ですね。この先しばらくすれば、モビルスーツや武器、機体のカスタムに使用できる部品くらいなら、お二人が所属していた軍のものについてはすぐに製造できるようになるはずです」
「そいつは助かるぜ。物資不足には慣れっこだが、さすがにメンテナンスや消耗品交換もろくにできないんじゃ戦いようがなかったからな」
ジョニーはかねてからの心配が晴れ安堵する。そして、ハンガーラックで静かに眠るトルネードを見上げた。
「……まさか、二度目の生をガンダムと共闘することになるとはな……正直予想外だぜ」
自分でも無意識に笑みを浮かべつつ、ジョニーはつぶやいていた。
「私もだ、ライデン少佐。よもや、連邦の白い悪魔と呼ばれていた者が、我らの味方に回るなどとは、私もたった今まで思いもせなんだ。敵にすると厄介ではあるが、味方に回ると、まさかこれほど頼もしいものとはな」
ジョニーとマツナガは色めきだっていたが、マークはそれを諌めるように言う。
「そんなのは買い被りさ。ガンダムという機体が最強なわけじゃない。モビルスーツってのは、優れた機体に優れた乗り手が組み合わさってこそ、初めて伝説になるんだ」
「……ふむ、では、貴官らにとってのガンダムとは、どのようなものなのかね？」
逆にマツナガに聞き返され、困惑しながら、エリスは答えた。
「……そうですね……ガンダム……いわばシンボル、のようなも

のでしょうか……」

◇　◇　◇

数多の世界には、様々なガンダムがいました。
所属や勢力、思想や信条は乗り手ごとに違いましたが、たった一つ、共通しうることがあります。
それは、乗り手が善であっても悪であっても、ある時は思いの、ある時は強さの、ある時は正義の象徴だったということ。
人々は、いつの時代も、ガンダムという存在に、願いと希望を託して戦場に送り出すのです。

願わくば、戦争を終わらせるために。
願わくば、苦しみから解き放たれるために。
願わくば、弱きものを、守りたいものを守るために。

そして、ガンダムというモビルスーツは、その人々の願いにこたえられる力を持つもの。

ゆえに、ガンダムとは、希望であり、乗り手の想いと、正義を体現するシンボルなのだと。

私はそう思うのです。

◇　◇　◇

「なるほど、象徴か……言いえて妙だぜ」
エリスの答えに、ジョニーも同意した。
「そうだな、今考えれば、連邦があのようなモビルスーツに組織の威信とプライドをかけていたこと、私も理解できる気がする」
「白い奴が無敵だったんじゃない、結局あれは、乗り手との組み合わせ

がこの上なく良かっただけのことだったんだな」
「……ガンダムという名を持つ機体は数多あり、歴史に名を残さず消えた機体もまた多くあります。あなた方の時代でいうガンダムとは、そのような存在だったのですね。こちらこそ、勉強になりました」
「なるべくなら、あんな奴とはもう二度と会いたくないがな」
　ジョニーは笑って両手を上げた。次回があっても敵う自信はないという諦めのような動きであった。
「なんだ？　それじゃあ、俺とやり合うのもなしってことか？」
　突如として彼らの頭上から別の声が降ってくる。見上げると、若い男が上の通路から身を乗り出していた。ぼさついた髪に迷彩柄のバンダナを着用し、赤のインナーと埃っぽい黒のジャケットを着用している。
「もう、またですかラナロウ？　強者似合うとすぐ実力比べをしたがるのは、あなたの悪い癖です」
「少ねえ楽しみなんだよ、ほっとけ」
　ラナロウと呼ばれたその男は、エリスの咎めにも耳を貸さず、視線をジョニーに向けたままそう答えた。
「あんたは？」
「おっと悪い、自己紹介が先だったな。俺はラナロウ・シェイド。見ての通り、同じくこの艦のモビルスーツパイロットだよ」
「ってことは、あんたがたのチームメイトなのかい？」
「ああ、それでもって、ラナロウはあのトルネードの乗り手だ。言っちゃなんだが、トルネードの操縦なら、ラナロウがこの隊で一番だろうな」
「彼はもともとフリーの傭兵でしたので、戦闘技術は私もマークも認めているんですが、強いパイロットと出会うとすぐに実力を比べたがるのが癖で……彼が失礼をしました、申し訳ありません」
　エリスが申し訳なさそうに項垂れている。マークはそんなエリスを見て苦笑の表情を浮かべていた。
「はっはっは、いやいや、悪くない。私はああいう男は嫌いではないぞ」

萎縮するエリスとは反対に、マツナガは笑ってラナロウの在り様を評価していた。勿論、横のジョニーも同様だった。
「ラナロウとか言ったか？　俺でよければ、ゲルググが直ってからいくらでもシミュレーションに付き合ってやるぜ。こっちも、怪我で鈍った腕を少しでも取り戻したいしな」
ジョニーは彼を見上げながら大声でその意を伝える。
「本当か!?　こいつは有難え、その約束、忘れるなよ」
そう言うとラナロウは手を振って、デッキから姿を消した。
「はあ……本当にすみません。まさか初対面で喧嘩を吹っ掛けられるなんて……」
「気にしなさんな。俺も、ああいう闘志の多い奴に会ったのは久々でね。一人くらい、気兼ねなく腕を比べられる奴がいたほうが、気が楽ってもんだからな」
「そう言っていただけると、私としても助かります……」
頭を抱えるエリスに対しジョニーは笑っていたが、マークはそっとエリスに耳打ちする。
「……ラナロウでこれならいいんだが、もしクレアと会ったらどうするんだ？」
マークからの一言に、エリスの口から再びため息が漏れた。
「……そうね、それが目下一番の問題だわ……とりあえず、後でクレアには忠告しておきましょう」
二人はジョニーとマツナガに聞こえない声で密かに打ち合わせる。もしこの会話を誰かが聞いたのなら、この場にいないそのクレアという人物は、二人にとってラナロウ以上の悩みの種な存在であることは想像に難くなかったが、今それを知る者は他にいない。

◇　◇　◇

人が世界に生まれ、育ち、子を育み。そして死ぬ。
そんな当たり前のことですら、機械に管理されたプログラムである

と知った。

その時、俺、ラナロウ・シェイドは、自分という人間の根幹を激しく揺さぶられた気分になった。

この世界に生きる人間すべてが機械の管理するプログラムなのだとしたら。

俺のこの湧き上がる強さへの衝動が、そうなるように設定されたただの動きでしかないのか。

いや、違う。

俺は激しく首を振った。

この内から湧き上がるものは、決して感情のない機械ごときに真似できるものじゃねえはずだ。

ならば、これこそが、機械ではない、生物として生きている証拠でなくて何なんだ。

とはいえ、やみくもに強さを求めてはみたが、答えは出なかった。

気が付いてみれば、いつしか俺は傭兵稼業に手を出すようになっていた。

強き者と戦い、弱き者を助ける。

血生臭いことだって何度もしてきたし、命を落としかけたことだって一度や二度じゃねえ。

だというのに、俺の中には、どういうわけかいつまでも満たされない、空虚な感情が居座り続ける。

助けた者たちから感謝の言葉を述べられても、達成感は感じこそすれ、満足感は感じなかった。

ラナロウ・シェイドという人間の、決して満たされぬ感情。
これが満たされるとき、俺は人間として、やっと満足ができる生き方ができるんじゃないか？

そうだ。

この満たされない感情こそ、機械が定義できないものの証拠。
問題に対して、明確な答えを提示できない何よりの証拠だと言えるじゃないか。

なら、その機械サマとやらに証明してやろう。

人間の欲する強さは、機械でそう簡単に定義できるプログラムのようなモノじゃねえってことを。

せいぜい俺に強者をぶつけてくるがいい。

ならば俺は、それを打ち倒すことで、漸くこの感情が満たされていくはずだ。

◇　◇　◇

「だぁ～ちっくしょう!!」
コクピットから飛び出すなり、ラナロウは地団駄を踏んで悔しがった。
「いやあ、なかなかの戦闘センスじゃないか、思ってたより凄かったぜ

？」
　そんなラナロウに、ジョニーは笑いをこらえながら言う。
　格納庫でラナロウから取り付けられた戦闘シミュレーターによる対戦の約束。ジョニーが応じたのは、それから二日後のことだった。
　結果はこの二人の反応を見ればお分かりいただけることだろう。ぼろ負け、というほどだったわけではないが、ラナロウはセンスではやはり本業のモビルスーツパイロットには及ばなかった、ということである。
「格闘戦ならたぶんお前さんのほうが勝ってたぜ？　俺も押し負けると思ったのは初めてだったしな」
「……押し負かせなきゃあ意味が無ぇんだがなあ」
　やはりラナロウは納得がいっていない様子だった。
「私も、クロスレンジでの格闘戦であれば貴公に分があると思ったぞ。ただ、それ以外の――――すなわちミドルレンジ以上の射撃戦では、ライデンの方がかなり上回っているな」
「へいへい、丁寧なご指摘に感謝しますよ」
　ラナロウは半ばやさぐれたような調子で答えた。望んでいた強者との戦いがようやく叶ったと思ったとたんにこの仕打ちである。傭兵たる彼が、センスという得意な分野で上から叩きのめされたのである、それでは彼がへそを曲げるのは無理ないことだとマツナガは思った。
「もっとも、今、あのガンダムを我々が使ったらいいかと言えば、そうでもないと思うがね」
「ああ、俺もそう思うぜ、マツナガさんよ」
　格納庫に並んで留め置かれているトルネード、そして真紅と白のゲルググ。それを見ながらマツナガはラナロウに聞こえないくらいの声でつぶやき、ジョニーもそれに賛同した。
「あのガンダムとやらは、全身が武器庫だ。ゆえに、火器管制を担うには、パイロットにそれなりのテクニックが要求されるはずだと思うのだが」
「ああ、それで言えば、あのラナロウという男、そのあたりに関しては

かなりのものか……」
傭兵という彼の肩書を聞いて、その二人も納得できるものがあった。戦場では手持ちの火器管理は重要なことだ。弾を切らすということが戦場では即、命の危機なのだ。だからこそ、パイロットは自分の機体の状態を常に把握していなければならない。
二人がシミュレーターで対峙したトルネードガンダムという機体は、ビームライフルとビームサーベルだけではなく、腕部にガトリング砲、胸部に拡散ビーム砲が装備されており、小型ながらかなりの火力を有していた。モビルスーツごとに役割がある程度決まっていたジオンのモビルスーツと比較できるものではないが、全身が武器の塊のようなこの機体をコントロールできる人間は限られている。

「む!?」
マツナガが何かに気づき、自分の機体のコクピットに駆け込んだ。
「これは……乱入……!?」
マツナガ機のコクピットはシミュレーターモードが勝手に起動され、画面には外部からの挑戦者を示すアラートの表示が並んでいる。それらの表示を突き破るようにしてコクピットモニタに映し出されたのは、彼もよく見知った機体だった。
純白の四肢、赤、黄色、青のトリコロールに彩られたボディーカラー、V字型のアンテナ、そしてモニタ越しでも伝わる、こちらの動きを先読みしているかのような機動性。
「――ガンダムか!!」
操縦桿を握りしめながら、マツナガは忌々しきその機体の名を呼んだ。
多くの同胞を屠った白い悪魔。かけがえなき同僚のエースたちがことごとく敗れ去った相手。ここで太刀合うことができるとは、これも生き恥をさらしたゆえの僥倖というやつか。
敵に目を配りながら、自機の状況を確認する。
ＭＳ―１４Ｂ、ゲルググ高機動型。ジオンの最終量産機であるゲルググに、Ｂ型と呼ばれる追加スラスターを装備した高機動型バック

パックを装備した機体である。
前日にケイから自分の専用機のレストアが完了したと聞き及び、いざ格納庫に足を運んでみて、マツナガは驚いた。そこにあったのは、これまで自分が搭乗していたゲルググとは同種であるが異なる機体だったからだ。
記憶が正しければ、自分が搭乗していたのはＭＳ―１４ＪＧ、ゲルググ・イェーガーと呼ばれる狙撃型のゲルググではなかったか。しかしそこにあったのはＭＳ―１４ＪＧではなく、ＭＳ―１４Ｂ。ジョニー・ライデンが使用している高機動型ゲルググと全く同種の機体だった。
「すまないね、シン・マツナガ。あんたの機体、出来る限り調達しようとしてはみたんだが、何せデータが足りなくてね。なんとかジョニー・ライデンの機体スペックを流用して間に合わせるしかなかったんだ」
油にまみれた手で頭をかきながら謝罪するケイの技術屋としての悔しさをにじませた顔が、今さらながら思い浮かばれる。メカニックにとっては、パイロットの望むように機体をチューンアップするのが仕事であるはずで、それを完遂できなかった彼女の悔恨は察するに余りあるものがある。
しかし、パイロットとしても意地はある。メカニックが、たとえ不完全でもベストを尽くせたのなら、その仲間を守るために、パイロットも戦場でベストを尽くすのが礼儀というものだ。
やってみせよう。ケイ女史には今後も期待を込めてこの機体を使ってやらねば、失礼というものだ。

ビームライフルとシールドはある。ビームライフルはゲルググの制式採用モデル。イェーガーで使っていたビームマシンガンと比べれば取り回しは軽い。操縦桿回りもイェーガーとほぼ同じだ。出力はイェーガーの半分ほどではあるが、相手がガンダムなら問題ない範囲だろう。
足元のペダルを踏みこみ、スラスターを全開にする。座席が振動

し、疑似的なGが身体にのしかかる。
暫しの間、忘れていた感覚がよみがえった。そうだ。これこそ、ソロモンの白狼として、宇宙を駆けた、あの時のものだ。
奴は忌々しきガンダム。しかし、姿かたちは奴そのものだが、しょせんはプログラムだ。あの戦争で活躍した白い悪魔の機体データであるはずはない。
ならば、ここで一矢報いようではないか。死者の弔いではない。白狼という、戦士のプライドにかけて。
「ゆくぞ、白い奴!!」
その純白の体躯、白狼の牙をもって、血の紅に染めてやろうではないか。

◇　◇　◇

思った通り、白い機体が撃ってくるビームライフルは、噂に聞く悪魔のような弾道ではなかった。狙いはそこそこ正確だが、三次元機動をかけながらの射撃はまだまだ甘かった。撃てば足が止まり、こちらの射撃を回避すれば反撃が疎かになる。
「狙いはいいが、回避が甘いぞ!!」
ローリングして一発を回避し、続けざま放ったビームライフルが、ガンダムのシールドの三分の一を溶かし砕く。衝撃を相殺しきれず、ガンダムが体勢を崩した。
「もらった!!」
バックにマウントされたビームナギナタを抜き、腰から下を落とそうとマツナガは斬りかかった。が、ガンダムは動物的な勘を思わせる直感的な動きでこちらもビームサーベルを抜き、逆手でもってその一撃を防いだ。
「むっ!!」
やるな、と思ったその時、ノイズが走る通信機から、相手のものと

思しき声が飛び込んでくる。
「……わ……わわっ、やべーぜ、邪気……来たかぁ、ってね!!」
「……この声、女か!?」
　通信機から放たれた声は、間違いなくまだうら若き少女のものであった。おおよそ戦場という場には似つかわしくない、底抜けに明るい声に、さしものマツナガも一瞬気を抜かれた。
「ちぃっ、バレちゃあしょうがない!!　一か八か、やってみるさぁ!!」
　同時に、ガンダムはサーベルを切り払って振り向きざまキックをゲルググの胸部に直撃させた。
「ぐぅっ!?」
　そのダメージが計算された通りに、ショックを与えるべくシートが揺れる。直後、モニターからガンダムの姿が消えた。レーダーはガンダムが死角を取るべく、回り込むように動いていることを知らせていた
「くっ、甘く見ていたか……!!」
　マツナガは即座に思考を切り替えた。少女とはいえ、一端の戦士だ。気を抜けば、逆にこのサイバー世界の宇宙に、白狼の骸を晒すことになってしまいかねない。
　白き狼と呼ばれた戦士として一度死んだ身ではあるが、だからといって二度も晒し首になってやるほど、白狼のプライドは安いものではないのだ。

「白狼を、なめてもらっては困る!!」
　ビームライフルの火線が、ガンダムが携えるビームライフルを貫き、宇宙の火球、のち塵へと変える。
「まだまだっ、クレア・ヒースロー、吶喊しまぁす!!」
　しかし、まだガンダムも戦意を失わない。もはや形振り構わず、原形を留めなくなったシールドを捨て、両手にビームサーベルを構えて接近戦を挑みにかかってきたのだ。
「むっ!!」
　だが、ここでもやはりマツナガの戦士としての技術が上を行った。

両刀のビームナギナタを巧みに動かし、左手の斬り下ろしを右の刃でいなし、続く右の斬撃をシールドで受け止める。矢継ぎ早に繰り出される太刀筋を的確にさばき、受け流していく。
　両刀という特性上、ともすれば自分を切りかねないビームナギナタではあるが、熟練した戦士にかかれば、二刀すら一本で受け止める業物と化すのだ。
「うっそ!?」
　モニターの向こうで、クレア・ヒースローと名乗った少女が驚愕の声を上げる。
「勘はいいようだが、動きが止まっているぞ!!」
　そして、驚きのあまり、距離をとることを一瞬忘れたガンダムのすきを、マツナガは見逃さなかった。
　ガンダムの右手のビームサーベルを受け止めていたシールドをそのまま前へ突き出し、ガンダムにバッシュを食らわせた。
　重い音が響き、両手がビームサーベルでふさがっていたガンダムはそれをかわせるはずもなく、もろに食らって体勢を崩す。ウィークポイントががら空きだった。
「はあぁっ!!」
　そして、繰り出されたビームナギナタの一閃。一つ目のビーム刃がガンダムの左手をビームサーベルごと切り落とし、掌で持ち替えた返す刀で切りつける反対の刃が、ガンダムのコクピットブロックを真一文字に切り裂いた。

　モニター越しの宇宙に閃光が走り、表示される『ＤＥＳＴＲＯＹＥＤ』の文字がマツナガが勝ったことを示す。
「……」
　暗黒の宇宙に佇む白き狼は、自らの骸を獲るべく仕掛けてきた仇敵の散る様を、まるで崖から見下ろすように、理性の宿る獣のごとき目で、遠吠えも雄たけびも上げることなく、火球の光が暗黒に溶けきるまで、ただ静かに見つめていた。

ＩＩＩ．宇宙と地球と

「本当に、申し訳ありませんッ!!」
　しばらくの後、格納庫に、マツナガに深々と頭を下げるエリスの謝罪の声が響き渡った。
「ははは、謝ることはない。なに、私も腕を戻す機会だったと思えば、大したことではないだろう」
「すみません……彼女にはきつく言っておいたのですが……」
「ええ～、だってホンモノだよ？　ここで一戦交えなきゃ、オンナが廃るってもんでしょ」
「貴女はもっと敬意をもって接して、クレア!!」
　呑気な声に容赦なく被さるエリスの怒声。彼女の隣には、先ほどマツナガにシミュレーター戦闘を挑んで敗れた張本人、クレア・ヒースローと名乗った少女が、エリスに無理矢理頭を下げさせられていた。
　エリスよりも丸くて可愛らしい目つき、黒いショートヘアに丸く柔らかな顔立ち、それでいてスレンダーだが女らしいふっくらとしたボディーラインと、こちらもエリスに負けず劣らずの美女だった。
　性格も話をするだけでわかるほど底抜けに明るいようで、先ほど敗れたことをまったく気にしておらず、それどころかまるでジョニーやマツナガの知り合いであるかのように話しかけてきたのがつい数分前のことであった。
　そのあと、事態を察知したエリスが駆け付けたが時すでに遅く、クレアはエリスに雷を落とされたのち、こうして頭を下げさせられているわけである。流石にマツナガもこう猛烈な勢いで頭を下げられては怒る気にもなれず、それどころかクレアの明るさにつられ、却って笑いが浮かんでくる始末であった。
「それくらいにしておいてやれ。戦士はあまり細かいことを引きずるものじゃあないぜ」
　ジョニーに諫められたエリスは、ため息をつきながらクレアから手を放す。
「申し訳ありません……クレア、せめてまじめに自己紹介くらいはし

ておきなさい」
「はぁい」
　エリスにつかまれて乱れた髪型を直し、クレアは二人に向き直る。
「それじゃあ改めて。エリスと同じ部隊に所属してます、クレア・ヒースローですっ。お二人のことは、よくシステムのデータから見させてもらってました。お会いできて嬉しいです！」
　口調こそ垢ぬけていたが、背筋の伸びや敬礼の動きは、紛れもない戦士としてのものだった。そのあまりの意外さに、ジョニーもマツナガも一瞬ぽかんとしてしまう。
「あ～……そうか、まあ、よろしくな」
　ジョニーはやっとのことでそれだけの言葉を返した。
「クレアは歴史マニアでして……ジェネレーション・システムを介して、いろいろな時代のエースパイロットの経歴や武勇伝を調べるのが大好きなのです。挙句の果てには、シミュレーションの上でもエースパイロットの機体で訓練する始末で……」
　エリスがため息をつきながら説明した。なるほど、システムの上でしか知らなかった世界のエースパイロットが眼前にいるのだから、彼女の燥ぎようも納得が行くというものだ。さしずめアイドルに遭遇したファンの気持ちというやつだろう。
「まあ、そう気にしなくてもいいぜ。エースってのは、他の連中の目標になる為にいるんだからな。あこがれを持たれるなら、それはむしろ普通のことさ。腕試しさせてくれと言われりゃ、受けてやるのがエースの義務だ」
「うう……本当にすみません、そこまでさせてしまって……」
「心配せずともよい。貴官も間違いなく戦士の端くれ、お世辞にも強いとは言えぬが、魂はしかと篭っていたぞ」
「ホント!?　うわやったあ、白狼に褒められたあ!!」
　マツナガの称賛の言葉を聞くが早いか、まるで子供のようにぴょんぴょん跳ね、全身で喜びを表現するクレア。久しく接することのなかった純真無垢というものに、二人の心は和らぐ。
　その時、ニキの凛とした声が格納庫に響く。ブリッジからの招集命

令だった。
『ブリッジより通達します。ＭＳパイロット、およびクルーは全員ブリッジに集合してください。この後の作戦概要を伝達します』
「……来なすったか」
「……ああ」
ついにその時が来た。ジョニーもマツナガも、顔を見合わせずに空を見たままつぶやいたのだった。

◇　◇　◇

守りたいものを守るため、力を欲する。それ自体は、生物として当然の帰結であり、自然の摂理の中で生きるための術でもある。
だが、守りたいものを失ったとき、守るために得たその力がどこに向けられるのか。
世界のため。
そう建前をつけて、あくまでも戦いに身を投じる。それもよいだろう。
だが、世界のため、今の世界を変えねばならぬ時。
そしてそれが、守りたかったものを踏みにじって成されるならば。
戦士として生きた人間は、どのような選択肢を取ればよいのだろう。
守りたいものを守るのか。
それとも、守るべきだったものを捨てて、世界のため、非情な選択

をするか。

二者択一が余りにも大きな結果をもたらすと知ってなお、戦い続けねばならぬ戦士の宿命。

それは時としてあまりに惨い運命を戦士に迫る。

世界を守らんがため、守るべきだったものから刃を向けられた時。それでも世界のため、戦士は果たして大切なものを踏み砕いて進めるのだろうか。

その答えは、その選択を迫られた者のみぞ知る。

◇　◇　◇

「では、ブリーフィングを始めます」

マーク、エリス、ラナロウ、クレア、そしてジョニーとマツナガ。メンバーが集った艦橋で、ニキが手元のコンソールを操作し、モニターに作戦データを映し出す。

「今回我々が攻略する世界線はここ――――ジェネレーションNo.０２３３、ワールドコード『ＳＥＥＤ』。時にしてＣ・Ｅ（コズミック・イラ）・７１年、システム内では『ヤキン・ドゥーエ戦役』と呼称されている大戦です」

「ふむ、大戦、というからには、それなりに長期の戦争だったということか？」

「はい、コズミック・イラ暦の上では７０年２月１１日から７２年の３月１０日まで、おおよそ２５か月にわたって、地球とその周回軌道上に位置するコロニーを巻き込んだ大戦が行われたとあります」

マツナガの質問にニキが答え、モニターにもそのようにデータが表示される。

「すでにお分かりの人もいるでしょうが、事情を知らないお二方のために説明いたしましょう」
　モニターにはさらに別のデータが映し出される。
「まず勢力の上では、この世界では主に通常の『ヒト』たる『ナチュラル』と呼ばれる者と、遺伝子操作によって後天的・人工的に優勢的資質を付与された『コーディネーター』という人種のふたつが存在しています」
「遺伝子操作だって？」
　当然のように、ジョニーは驚いた声を上げる。が、ニキは予想済みであったのであろう、至って冷静であった。
「そうです。コズミック・イラの世界では遺伝子工学が発達していて、デザイナーベビーが、お金さえ用意できれば簡単に得られる世界となっているのです」
「……む」
「元は人間の持つ、無限の可能性を広げるための技術だったのだろうがな。とはいえ、世の中遺伝子工学で優れた人間を生み出せば解決できる問題ばかりなどと、そんなことはない」
　二人をやや置いてきぼりにしたニキの容赦ない講釈に見かねたゼノンが、開いた口の塞がらないジョニーと唸るばかりのマツナガに助け舟を出した。
「……どういうことだ？」
「なに、簡単なことだ。遺伝的にあらゆる分野の才能を得て生まれてきたコーディネーターと、結果を得るには努力を積み重ねるしかないナチュラル。才能的にここまで対照的な人種が存在していれば……後はわかるだろう？」
「……ふむ、成程、ナチュラルが努力の結果ようやく成し得ることを、コーディネーターはいとも簡単にやってのける。そうなれば、それを見せつけられるナチュラルに鬱屈した感情が溜まって行くのは当然のこと、つまり、それが戦争の火種と化した、ということだな？」
「ご名答です、シン・マツナガ。最初こそ、コーディネーターに寛容だった世界でしたが、彼らが学問や芸術、スポーツなどあらゆる分野

で結果を出し続けていれば、下位に甘んじるナチュラルに不満が溜まるのは、至極当然のことです」
　ニキは内心、ようやくその答えが出たか、という思いだったが、顔には出さなかった。
「もちろん、ナチュラルの側も対抗はしたのだ。コロニー従事者だったコーディネーターたちが自治独立を求めてきても、自治権と武装を決して認めなかった。逆に生産ノルマを課し、あくまでも地球の従属国家でいさせようとしたわけだな」
「そして、そんな対立を延々繰り返していれば、当然テロや武力衝突に発展していかないわけがありません。そこから先は、貴方方にも覚えがありますね？」
「……ああ。俺たちもスペースノイドの自治独立のために戦った身だ。宇宙に追いやられた人間たちの憤りってのは嫌ほどわかるぜ。才能の優劣は抜きにしても、自分たちの都合で宇宙に追い出しておきながら、地球のために重い税金を、それも水や空気という宇宙には無いものにまで払わなければならなかったのか、ってな」
　ジョニーの言葉にマツナガも横で頷く。自分たちはスペースノイド。地球の人間はアースノイド。そう言って、宇宙の側がいったいどれだけの不利益を課せられてきたか。それは二人にとって嫌というほど身に染みた忌々しき戦いの発端。
　それを考えるだけで、二人は古傷がえぐられるような、鈍い痛みにも似た感覚を覚えた。
「だが、ことこの世界では、構図が少々逆のようだな。宇宙側の人種が優秀すぎたがため、地球の側はその利権を少しでも多く得ようと、和平ではなく圧政を選択したとみえる。これは……地球側がすでに体力がなかった、ということでよろしいか？」
「その通りです。この時代にはすでに石油資源は枯渇し、度重なる民族紛争や宗教間の争い、世界的な経済不況などで、もはや何十億という人間を養えるだけの力は、地球には残されていなかったのです。それこそ、工業生産をコロニーで行わなければならないほどに」
「……結局、人類はどこの世界でも、己の世界を顧みずに増え続けるっ

てのか？　俺たちが言えた台詞じゃないが、皮肉といえば皮肉な話だな」
　ジョニーはため息をつきながら頭をかくしかなかった。
「もっとも、コズミック・イラの世界では、最初のうちは平和的な解決を望もうと、スペースコロニーの建設を急ピッチで進め、改暦から１０年後には宇宙への移住が可能だったがな」
「ですが、その世界に突如として遺伝子操作されたデザインベビーが現れたことで状況は変わったのです」
　映し出された一人の男の写真。がっしりとした体格に聡明さをうかがわせる顔つき。
「この男は誰かね？」
「彼が世界で最初のコーディネーターとされるジョージ・グレンです。出生は６０年経った今も謎のままで、どのような経緯と技術を持って生み出されたのか、それはジェネレーション・システムの中にもはっきりとしたデータは残されていません」
「勿論、この男は自分の存在が人種間対立をあおることは考えこそすれ、願ってはいなかったがな。だが結果として、世界には極秘出生のコーディーネーターが溢れ、そうでない人間、すなわちナチュラルは次第に活躍の場を奪われていったのだ」
「そして、ナチュラルの不満が高まるにつれ、この『プラント』と名付けられたコロニーに向けたテロが頻発し、武装を認められていなかったコーディネーターたちは、対抗として地球の工業製品の生産をやめると脅しをかけるのです。そして、やはりというべきでしょうか……地球側はこれを武力で威嚇し、無理矢理にでも自分たちの都合のいい生産拠点で居させようとしたわけです。ですから、ますます溝は深まりますね」
「コーディネーターが食糧生産をするようになると、地球側が武力で威嚇し、これにプラントはモビルスーツを開発して対抗した。そして、武力開発による軍拡の道が開かれるのさ」
　マークが補足を入れた。
「プラントは、食糧の輸入だけはあくまでも地球側に頼っておったか

らな。その命綱を切られるわけにはいかなかったのだ。だが、結果として、幾度かの武力衝突を経て、事態は最悪の結末へ向かうことになる」
　そう呟くゼノンの目つきは真剣なものだった。
「時にしてコズミックイラ７０年2月１１日、プラントの農業用コロニーのひとつ『ユニウスセブン』に、地球側が核ミサイルを撃ち込み、コロニーは壊滅。２４万３０００人の人命が一瞬にして宇宙の藻屑となりました」
「なんだって!?」
　ここまで冷静だったジョニーとマツナガであったが、さすがにこの一言には声を上げざるを得なかった。他のブリッジクルーは至って冷静なままであった。二人の驚きに満ちた声が、ブリッジ内に反響するのがやけに長く聞こえた。
「ことを起こしたのは地球軍のタカ派である『ブルーコスモス』と呼ばれる組織ですが、これはこの際置いておきましょう。これによって反発が頂点に達したプラント側は、それから2か月後に大規模な地球侵攻を開始し、その際『Ｎジャマー』と呼ばれる装置を、地球上に百とも千ともいわれる数、投下したのです」
「正式には『ニュートロンジャマー』と言ってな、まあ簡単に言えばその装置の周りでの核分裂によるエネルギーの生成を阻害するもの、と思えばいい」
　ニキの説明に今度はマークが補足した。
「成程、核がよほどやつらの癇に障ったということか」
「それもありますが、これによってプラント側は、原子力に頼っていた地球上のエネルギー生産を瀕死に陥らせ、そのうえで、自分たちに非戦であるという確約を取り付けるのなら、エネルギーを輸出するという、これまで地球側が行ってきたことと似たような交渉を展開したのです」
「もっとも、地球軍はプラントに従う姿勢を見せた地上の国家も敵とみなし、宣戦布告を行っていたようだがな」
「やれやれ、結局どこまでいっても、地球の人間たちは地球に住むこと

自体が特権の証だと信じて疑わないってわけかい」
ジョニーはますますあきれた素振りを見せた。
「前置きが長くなりましたが、ここからが今回の本題です」
ニキはさんざん説明をして停滞感のあった場を咳払いで仕切りなおす。
「前にも説明したかと思いますが、我々の目的は、本来歩むべき歴史と異なる流れに乗ってしまった世界を、元の流れになるよう修正することです。そこでまずはこちらをご覧ください」
ニキが差したモニターに別のデータが表示される。
「これは、ジェネレーション・システムが記録している『本来の世界』の流れからどれほどズレているかを示したものです」
詳しい内容が何かはジョニーにもマツナガにも分からなかったが、世界のいろいろなデータをまとめたものであろうことは察しがついていた。そしてそのデータには、ところどころに文字化けやノイズが混じっている。
「これがそうなのかね？」
「はい、我々が今から進入するコズミック・イラの世界は、今はまだ異変のレベルは小さいですが、放置しておけばこの世界を崩壊させかねないほど重大な歴史改変につながりかねないでしょう」
「先行して第2小隊が、おおよそ半月前からこの世界で偵察とデータ収集を行っている。まずは彼らと合流を目指すのが、当面の目的ということになる。質問はあるか？」
ゼノンの問いかけに、二人は数刻黙ったままだったが、やがてジョニーが口を開く。
「……俺たちが、その世界にモビルスーツで出撃して、敵を撃墜する、それでその世界に影響は出たりしないのか？」
「そうですね、その説明をしておくべきでした」
そしてニキ曰く、世界には「修正力」があるという。
ジェネレーション・システムは、世界の流れを管理するシステムであり、それが異常をきたしていること。

世界には本来あるべき『流れ』があり、その流れから外れるようなことがあれば、ひとりでにある程度までは元の流れに戻ろうとする力がある。

例え、どこかで世界のバランスを崩すようなことがあっても、そうなれば世界は別の場所で釣り合いを取ろうとする。残酷な言い方をすれば、本来死ぬべきはずの人間が生き残ってしまったのであれば、世界はどこかで別の人間を殺すことでバランスを修正するのだ。

今回の事態は、その修正力の範疇を超えた事態であるがゆえに、自分たちが手を加えなければ解決できないのだということ。

「……俺たちの機体が万一撃墜されでもしたら、あちらの世界に余計な歪みを与えたりはしないのか？」

「それはおそらく。基本的に、その世界の技術はその世界の中でしか通用しないものですから、そうなったとしても、簡単には真似をされる心配はありません。ですが、念のため、ケイには緊急用の破壊装置を積むように、あらかじめ頼んであります」

「……そいつはありがたい。とはいえ、もし機体を自分で破壊する時があるなら、それは白狼が屍を晒すときに他ならぬがな」

「ああ、俺たちとてエースの端くれだ。機体をそう簡単に捨てられないし、何より、命を預ける相棒を、簡単に殺すわけにはいかないな」

マツナガは腕を組んだまま呟き、それにジョニーも賛同した。二人の中にまだかすかに残っていたエースとしての矜持の炎が、今再び燃え上がろうとしていた。

◇　◇　◇

私は、正義の味方になりたかった。

私は、誰かを救いたかった。

私は、何かを守りたかった。

私は、皆から『ありがとう』と言われたかった。

私は、エースというものに憧れた。
私は、エースになりたかった。
言葉で着飾っているだけだ。
憧れだけで、エースにはなれない。
理想だけで世界を救えるのなら、戦争など起きない。
もう何度、否定の言葉を聞いたかわからない。
――そんなこと、はじめから知っている。
だけど、それでも。
それでも。
エースを目指すことだけは、絶対に間違いなんかじゃないんだ。
エースは、戦場にいるからエースなんかじゃない。
誇りを捨てず、誰かを守り、何かを救うため、戦うからこそエースなんだ。
だからこそ、私は、それを諦めない。
それになることを諦めたりはしない。
たとえ、途方もない時間の果てを、無限に彷徨うことになるとしても。

◇　◇　◇

「キャリー・ベースメインシステム、ジェネレーション・システムメモリーとの接続完了」
「パルスエンジン、稼働率７５パーセント、タイムバリアー突破まで００３２」
「操舵軸固定、時間航行ＣＰＵ、存在証明数式、理論展開」
「システム、オールグリーン。目標、ワールド０２３３、コズミック・イラ７１」

ブリッジに淡々とシステムチェックの内容と結果を知らせるクルーの声が響く。

――俺は、もう一度、戦士として再起する機会を得た。

「ワールド０２３３、システムプロトコル解析完了、インストール完了率８６％」

――ジオンのエースとしてじゃない、ひとりの戦士、ジョニー・ライデンとして。

「適応数式、適応完了。キャリー・ベース、次元潜航を開始します」

エンジンが轟音を上げ、艦内に振動が走る。

「ワールド突入まで、あと００２５、全戦闘員、第一種警戒態勢のまま待機せよ」

――戦うのは地球連邦ではないが。

「これより、ファーストミッションを開始する。機関全速」

――それでも、遂げられなかった戦士としての宿願を、今度こそ果たせる時が来た。

――真紅の稲妻、ジョニー・ライデンとして。

軽い衝撃とともに、機体がクレーンで持ち上げられスライドを開始する。カタパルトデッキには通信士であるルナが、チェック項目の読み上げをする声が響く。

『〝カタパルトオンライン、ＭＳ―１４Ｂゲルググ・マツナガ機、発進位置へ〟』

緊張感に満たされたコクピットの空気を破るかのように、ゼノンからの通信が割り込む。

『コズミックイラの「正当な」歴史は、さっきまでのブリーフィングで話した通りだ。時宗確率変動の予測データも渡したが、あくまでもこちらの仮定に過ぎん。いずれにせよ、システムが狂っている状態では、何が飛んでくるか分からんからな。気を付けてかかってくれ』

「ああ。戦場での戦況把握は、パイロットにとっても必須技能だ。そのあたりは衰えちゃいないつもりだ、信頼してくれて構わないぜ」

「我々とて、戦場での通り名を持つ身だ。自称したわけではないが、それに恥じることのない勘だけは持っているつもりだよ」

ジョニーもマツナガも、全く動じることなくそれに返答する。

『ならいいのだが……とにかく、まずは先ほど話したポイントに向かってくれ。其方にもデータを転送してある。第２小隊がそこで

待っているはずだ、くどいようだが、気を付けてくれよ』
『我々でも、状況は完全には把握できません。ジェネレーション・システムの狂いが世界にどの程度影響を与えているかは、貴方がたの目だけが頼りです』
ゼノンとニキの忠告に返答する二人。ジョニーの口調は軽いものだったが、本人の心境は決して軽いと表現できるほど浮ついているわけでもなかった。
正直なところ、不安と緊張と期待とが入り混じった、何とも言葉にできない複雑な気分を、二人は感じていたのである。
『〝カタパルトボルテージ臨界、ゲルググ・マツナガ機、発進どうぞ〟』
「――――出撃許可、確認した。シン・マツナガ、１４Ｂ、発進する!!」
爆発音とともにリニアカタパルトが点火され、Ｇが機体にのしかかる。アイボリー一色に塗装された白い狼は、まだ爪先すら触れたことのない異世界へと飛び出す。
『〝続いてＭＳ―１４Ｂ、ゲルググ・ライデン機、発進位置へ〟』
再び軽い衝撃。彼のパーソナルカラーである真紅に塗装された機体は、脚部をリニアカタパルトに固定される。
『〝融合炉正常稼働中、Ｂ装備を追加マウント〟』
横からアームによって差し出されたロケットランチャーを手に取る。ゲルググの標準装備であるビームライフルももちろん所持してはいたが、ジェネレーターの出力を気にせずともよく使い勝手の良い実弾兵器を、ジョニーは何となく手放せなかったのだ。
――――そういえば、これで撃墜したのは何機だったか。
今さらながら、ジョニーはそんなことを思い出す。自分の最終的な撃墜スコアなど、半死人となった今では知るすべもないのだが、それでも口惜しさが残っていないと言えば嘘になる。

『私たちもすぐに追いつきます。それまで、皆のことをお願いします』
「オーケイ、任されてくれ。こっちもエースとして、やってみるさ」
続行して発進準備を急ぐエリスの声。
汎用性を重視した量産機に準じる二人と違い、ガンダムはワンオフ機であるがゆえ、準備にも時間がかかるのは自明の理である。ガンダムだけを運用するならばともかく、そうでない機体も合わせて運用するならば、すぐに発進できる機体を先にすぐ出すのは当然の判断であろう。

『〝カタパルトボルテージ臨界。前方クリア、ゲルググ・ライデン機、発進どうぞ〟』
唸るような音とともに圧力がかかったカタパルトが撃発位置にセットされ、発進可能を示す青いランプが頭上に点灯する。

――それじゃあ、世界を救いに、行ってやろうじゃねえか。

『発進許可確認、ゲルググ、ジョニー・ライデン、行ってくるぜ!!』

World—I Cosmic Era

I・砂漠に輝く星

軍人というのは、得てしてやりづらい立場にいるものだとつくづく思う。

子供たちには憧れを。
市民には期待を。

そして、現場が見えない上の連中からは、邪魔者の視線を向けられる。

戦場とは、そうした人の感情が混ざり合った、この世の何たるかをもっとも端的に表した場所ではないかと思う。
そんな難儀な仕事ではあるのだが、やめたくてもやめることができないのが、軍人のこれまた頭を抱える部分である。

軍に志願する人間を様々見てきた記憶がある。そして、志願する理由は十人十色だった。

自分が軍に志願した理由は、もう朧げにしか思い出せない。ましてや、子供のころの想いなど、とっくに忘れてしまった。
だが、今でもこの手が、この血が、この心が騒ぎ立てている。

自分のなすべきことをせよ。
善悪がどうということではなく、必要であるから自分はここにいるのだと。

ならば自分は、戦士として、ここに立ち続けるのみ。

その身を、この腕を、求めるものが、必要としているものがある限り。

◇　◇　◇

「そうですか……やはり第八艦隊は壊滅しましたか」
肌を刺すほどではないが、冷たい夜風がかすかに吹く北アフリカ・リビア砂漠の真ん中。別の偵察部隊からの情報を受け、マリア・オーエンスは呟くようにそう言った。
その小さな声は、モビルスーツのコクピットに吸い込まれ一瞬で消えたが、すぐに別の通信が入ってくる。
『マリアさん、今の通信は……』
「ええ、周回軌道に潜伏中のエージェントからの情報です。間違いないでしょう」
『そうですか……悲しいですが、ある意味予測通りですね』
同じ部隊のエターナ・フレイルからだった。当の彼女は、自分たちとの思ったとおりに状況が推移しているものの、予測されていた艦隊の壊滅という事態に胸中は複雑であるという顔だった。艶やかな銀髪をそろりと掻き上げながら、エターナはそう呟く。
『デュエイン・ハルバートン……惜しい人物を亡くしましたわ。軍人としてはともかく、人の上に立つ人としては、優秀な方でしたのに』
「そういえば、貴女は彼と会ったことがあったのでしたね、キリシマさん」
『ええ……と言いましても、あちらの極秘プロジェクトに、裏方で資金を提供させていただいただけ、ですけれど』
そう言ったのは同じく部隊の一員であるフローレンス・キリシマだった。彼女は壊滅した艦隊の指揮官と個人的につながりがあったのか、美しい黒髪に似つかわしくない、それでいてその切れ長の目には不思議とよく似あう、少々残念な顔をする。
「では、貴女も『G』の計画に参加を?」
『参加……と言うほどではありませんわ。まあ、隠すつもりもございい

ませんから正直に申し上げますが、ビジネスとしてそれなりに価値あるものであったことは、否定しませんけれど』
『……しかし、皮肉なものですね。まさか、それが自分たちに牙を剥くとは、貴女も予想できなかったのではないですか？』
『いいえ、はっきり言って自業自得ですことよ』
マリアの至極もっともな疑問を、キリシマは一言でばっさり切り捨てた。
『もともと、あれはナチュラルには到底扱うことのできない代物。扱うならば、むしろコーディネイターの方が十全に動かせると思いますわ。ああ、操縦できないということではなく、もっと根本的に、普通の人間が人型機動兵器（モビルスーツ）を操縦できるＯＳを、そうホイホイと作れる訳がありませんもの。身の丈を知れ、というやつですわ』
「……まったく、貴女という人は、いつもながら辛辣ですね」
『正当な評価、と言ってくださいまし。これでも名家の端くれ、不逞な輩を見抜けるくらいの目がなくては、生き残っていけませんから』
「まあ、確かに、貴女ほどコネクションのある人間も、私たちの中にはいませんけど」
「ビジネスに正邪など関係ございませんわ。重要なのは、それが自分にとって得かどうかだけ。コネクションは、その結果に過ぎませんことよ」
マリアのため息交じりの言葉にも、キリシマは操縦席で腕を組みながらふん反り返るような姿勢のままどこ吹く風といった調子で、特段憤慨する様子すら見せなかった。あくまでもビジネスの相手以上でも以下でもなく、そしてそうした相手には特段の肩入れはしない、と言葉尻がそれを語っているかのようだった。

コズミック・イラ７１年、２月１４日。
この前日、地球連合軍第八艦隊は、俗に「低軌道会戦」と呼ばれる大気圏でのザフトとの戦闘により、圧倒的な物量差を覆され壊滅した。
地球連合軍艦船総数は数十隻、主力のモビルアーマー・メビウスも

１００機以上という勢力であったが、ザフトの主力であったモビルスーツ・ジン十数機と、４機の「Ｇ」と呼ばれる試作モビルスーツにより、そのほとんどが宇宙の藻屑と消えたのである。
キリシマが極秘に資金面で協力を行った「Ｇ計画」は、ナチュラルがコーディネーターの駆るＭＳに対抗すべく生み出した「Ｇ」と呼称される試作ＭＳ五機の総称である。

ＧＡＴ―Ｘ１０２　デュエル。
ＧＡＴ―Ｘ１０３　バスター。
ＧＡＴ―Ｘ２０７　ブリッツ。
ＧＡＴ―Ｘ３０３　イージス。
ＧＡＴ―Ｘ１０５　ストライク。

性能はザフトのジンを凌駕し、実弾ダメージを相殺するフェイズシフト装甲や、ジンでは搭載不可能であったビーム兵器の装備など、既存のモビルスーツのはるか上を行く別次元の総合性能を有していた。
だが、地球連合の救世主となるはずであったＧは、突如としてその地球連合に牙を剥くこととなる。

時にしてコズミック・イラ７１年、１月２５日。

ザフトは、精鋭部隊をＧの建造工廠があった資源コロニー「ヘリオポリス」に潜入させ、五機のＧのうち四機を我がものとしたのである。
残る一機、ストライクは奪取を免れ、その機体の奮戦によりそれ以上の戦力流出は防ぐことができたものの、結果としてコロニーは戦闘に耐えられず崩壊し、虚空に消えることとなった。
そして、強奪されたデュエル、バスター、ブリッツ、イージスの４機は、低軌道会戦での圧倒的物量差をその性能でひっくり返し、ザフトに勝利をもたらすこととなった。

それが、つい昨日のことであった。

しかしながら、事これだけの事態となっても、マリアたちに手を出すことは許されなかった。彼女らの任務はあくまでもキャリー・ベースの到着までの斥候である。キャリー・ベースがこの時代に発生したジェネレーション・システムのエラーとなる事象を特定するまで、その時代への介入はできない。もし介入を強行すれば、世界に予想外の狂いが発生し、本来の歴史から大きく外れた歴史へと進みかねないからである。

そうなれば、その先に待つのは狂ったデータ。システムのワールド、つまりは世界そのものの崩壊だ。

ゆえに、彼女らはヘリオポリスの崩壊も、第八艦隊の壊滅も、遠くから何もせず、ただ見ていることしかできなかったのだ。一瞬で何千何万という人命が消えていくさま。心優しいマリアやエターナには、それが最初から時代に刻まれている出来事ととはいえ、何もせずいるのは辛くもあった。

『キリシマさん、交代時間です、持ち場を代わりましょう』

通信で別の声が割り込む。この部隊の黒一点、シェルド・フォーリーのものであった。これまで斥候に出ていた彼が、交代する時間となったからだ。

「あら、もうそんな時間ですの」

交代となるキリシマはモビルスーツの堅い座席で凝った身体をほぐしながら、機体を起こす。

「まったく、もう少し座席が柔らかければ……これは作戦が終わったらケイさんに相談ですわね」

ぶつぶつ文句を言いながらも、キリシマはシェルドが戻ってきた方角へと去っていった。

「ご苦労様、シェルド。無理させちゃったわね」

『いいよ、マリア姉さん。これも任務なんだし』

マリアは年若いシェルドに労いの言葉をかける。身体の線が細く、おおよそ戦いという言葉に似つかわしくない華奢な風貌の持ち主である彼は、しかし持ち前の芯の強さで、これまでも幾度となく任務を

こなしてきた戦士に違いなかった。
そんなシェルドは、マリアを姉さんと呼んで慕う。戦闘に慣れていなかった頃の彼をサポートしてきたのはマリアであり、シェルドにとっては血の繋がりがあるわけではないもののマリアは家族同然の存在であった。
そしてマリアにとっても、シェルドは戦いに身を置く彼女にとって、数少ない家族同然に気を許せる不思議な存在だったのだ。
「ふう……」
マリアは夜風に溶けるような小さなため息をついた。
砂漠とは過酷な環境である。昼は四〇℃以上の熱波が生きとし生けるものを焼き、夜は凍てつく夜風が、熱を持ったものを手加減なく冷え込ませる。
宵闇が覆う砂漠は、さながら銀世界。まるでダイヤモンドダストのように、夜空には美しい星が瞬いていたが、対照的にマリアの心中には淀んだ靄がかかっていた。
先遣隊としてキャリー・ベースを発ってから三週間が経過し、パイロットとはいえマークやエリスほどは経験した場数の多くないマリアには、部隊長の立場であることも相まって疲れが見えてきていた。仮にもパイロットであるので、一応の体力は持っているつもりであるが、長丁場をくぐりぬける忍耐力と平常心はまだ半人前なそれであった。
幸いにして食料や携帯品の備蓄はまだ充分にあったし、現地のエージェントとの連絡もとれており、何かのトラブルがあったとしてもすぐに補給を受けられる状態ではあった。
「……」
だが、シチュエーションのお膳立てと本人のメンタルが大丈夫かはまた別の話である。
曲がりなりにもエリートである彼女は、情報戦、モビルスーツ戦、格闘戦、何をやっても凡そひと通りのことはこなせる、才女と呼ぶべき優秀な人物ではあったが、しかしそれは言い換えれば何かに特化していない、平凡と呼ばれるような人物でもあった。

実際のところ、マリアが少なからずそれをコンプレックスに感じていたのは言うまでもない。こと、マークやラナロウのようなモビルスーツ戦を得意分野とするキャリー・ベースのメンバーを見ていれば、否が応でもそうなるだろう。

『マリアさん、キャリー・ベースからの暗号通信が入りました』

「！」

エターナからの通信で、マリアは微睡みかけた意識を引き戻された。

「読んでください」

『……《八の刻に虎は狩りへ。七の宵に方舟は砂漠に降り立つ》……以上です』

「……そうですか」

その暗号文でマリアはすべてを察した。

キャリー・ベースからの増援が到着するのは明日の夜。そして、増援が到着するまでのに戦闘が発生することが確実であり、そして少なくとも一時間の間は、この部隊だけで持ちこたえなければならないということを。

そして、その電文に込められたもう一つの情報。

遭遇しうる敵は、考えうる限り、この地で最も遭遇したくない相手ということ。

その名はアンドリュー・バルトフェルド。

砂漠戦のスペシャリストにして「砂漠の虎」の異名を持つ凄腕のパイロットである。

◇　◇　◇

マリアの隊が電文を受け取ってからおよそ２０時間後の一八三〇。

「随分と不思議な感覚だぜ、地球の重力は」

「ああ、この重力の中で生活しているアースノイド、彼らは我々よりこの重力に適応していた、悔しいが、そこだけは認めるべき点だ」

「だろうな。認めたくないが、この重力だけは、俺たちスペースノイドが作り出せない唯一のものかもしれないぜ」

ジョニーとマツナガはその砂漠という、スペースノイドには未知の大地に降り立った。

体にまとわりつく不可視の力。人が重力と呼ぶそれは、青き惑星の地表に降り立ったものに区別なく作用する。

宇宙で育ったジョニーとマツナガにとって、この重力という存在は言葉では言い表せないものだった。生まれ故郷であるコロニーも、回転によって人が生活するに必要なだけの重力は生み出されてはいたが、それは力学的法則による重力と偽った遠心力であり、地球という質量そのものが持ちうる重力とは甚だ別物だったからだ。

ゆえに、地球という生命の星たる、まとわりつくような重力に対しては、二人とも経験がほとんどなかったのである。

「……っと、感傷に浸ってる場合じゃねえな。確か……」

「ああ、情報に間違いがなければ、この辺りのはずだが……」

「……３６０度、砂と岩しか見えねえな」

見渡す限りは砂と岩しかない、宇宙のコロニーには存在せず、人の住みえない世界、砂漠。

あるのは見渡す限りの地と空を分かつ地平線のみ。

ちょうど、その地平線に、わずかな陽の残光が見えていた。あと数刻もすれば、灼熱の大地から寒冷の大地へとその有様を変える時である。

しかし、このようなところでも争いは起こる。そして、ここでの動きひとつでも、この時代を崩すに足る火種、あるいは爆心となり得る。だからこそ、自分たちはここに来たのだ。

そう考えたとき、ジョニーは少しだけ背筋が震えたような気がした。
「しかし、俺としては、先遣隊がいるなら、そっちと早く合流したほうが得策だと思うんだが」
「それについては私も同意見だが、まあ、彼らにも考えがあるのだろう。少なくとも、現地の地理に詳しい者に協力を頼むのは、選択としては間違いではないだろう」
「……確かに、俺たちだけじゃなく、クルーの全員にとっても未踏の地ってことだしな」
そんな砂漠に降り立ってしばらく。情報があるとはいえ、正確な位置までは特定できないポイントを探し求め、2機のモビルスーツは砂漠を歩き続けていた。そんなときである。
「……ん？　もしかしてあれか？　奴さんが言ってた基地ってのは」
砂漠に点在する岩石。その中でも大きな一つに、何かの搬入口と思われる横穴が、カーテンで覆われているのが目に留まったのだ。
「ああ、らしきものではあるな。私がアプローチをかけてみよう」
マツナガはコンソールを開き、ニキから受けたとおりの暗号を入力する。
ゲルググのモノアイが不規則に点滅し、入力されたメッセージを信号に変えて発信する。しばらくして、目の前の岩から別の光が発せられるのを、二人は目にした。
「発光信号……なるほど、どうやら間違いないようだな」
「……あそこが、『明けの砂漠』の基地か……」
ゆっくりと開き始めたカーテンを見つめながら、ジョニーはつぶやくように言った。

◇　◇　◇

「あれが、クルーゼ隊の追撃を逃れてきたっていう噂の『足つき』とやらかね？」
時刻は二一三〇．吐く息が白く煙る寒さの中、双眼鏡を覗き込み、

その向こうに佇む白亜の戦艦を見て、その男、アンドリュー・バルトフェルドはそう尋ねた。
「は、間違いないかと」
それに答えたのは、赤毛の若い男、副官のマーチン・ダコスタである。
「確かに最新鋭と言えば聞こえはいい……ハルバートンが身を挺して地上に降ろしただけのことはある。綺麗な艦だ。地球軍にとっちゃ、虎の子というわけか」
「情報では、おおよそ搭載戦力と呼べるものは、現状ストライク一機だけとのことです」
ストライクという名前を聞き、バルトフェルドはかすかに眉を顰める。
「ストライク……ヘリオポリスでクルーゼ隊が唯一手に入れ損なったっていう機体かね？」
「はい。確認できている限り、ほかはメビウスなど、宙間戦闘用の機体のみだと思われますが」
「……なら、いいんだがね。とはいえ、過信は禁物だダコスタくん。ストライクのおかげで、ヘリオポリスでの窮地を『足つき』が脱したというのも事実だろうからねえ」
「は、はあ……」
ダコスタは、実際に見ていないものはわからない、という顔で首を傾げた。バルトフェルドは双眼鏡から目を離さずに続ける。
「地上はNジャマーの余波で、電波での通信もままならない。ならば、こちらから先手を仕掛けたいところだが……ん？」
「えっ!?」
何かを見たようなバルトフェルドの言葉に、ダコスタは思わず身構えた。
「いや、今回はモカマタリを5パーセント減らしてみたんだがね……これァいいなあ」
が、バルトフェルドの口から発せられたのは、もう片方の手に握られたカップの中で湯気を立てている珈琲に対する感想であった。

「た、隊長……」
肩透かしを食らったダコスタ。バルトフェルドはそれを見て苦笑するしかなかった。
バルトフェルドの趣味である珈琲の研究は、戦いの中での彼のひそかな楽しみであった。艦長室には常に珈琲の香ばしい香りが充満し、果てに彼は偵察中のジープの中にまでそれを持ち込み口にする始末である。とはいえ、ダコスタ自身もそれは知っていたし、それに突っ込みを入れるまでが、この二人のいつものやり取りゆえ、下士官もそれを気にすることがなかった。
厳格な副官なら、もっとお叱りの言葉が飛んできそうなものだが、それをダコスタは溜息ひとつで済ませてくれるのだから、バルトフェルド自身は彼に感謝しかなかった。
「さて、いつまでも静観していても始まらん。少し打って出るとするかね」
バルトフェルドはカップの珈琲を飲み切り、それと入れ替わりに無線機を手に取る。その目線の先には、数台のジープと十両ほどの戦車、そして、まるで動物の姿をした4足のモビルスーツが3機。
「レセップス、二三三〇に目標へ砲撃を開始だ。それからバクゥ隊は発進準備をしておけ。足つきに奇襲をかける」
「はっ、こちらはいつでも。しかし、倒してはいけないということでありますか？」
そのモビルスーツ・バクゥに搭乗していると思しき隊員のひとりから、笑いながらの答えが返ってきた。それにつられてか、他の隊員からも笑い声が聞こえる。予想通りとバルトフェルドは思いつつも、隊長としては一応断りを入れておくべきと、やんわりそれに突っ込んでおくことにした。
「あー、君たちの自身は認めるが、侮るなよ？　アークエンジェルは、あのハルバートンが、第8艦隊を生贄にしてまで地上に降ろした艦だ。うまく行けば墜とすのに時間はかからないかもしれんが、一応、それを忘れずにな」
『はっ！』

「それからダコスタ君、彼にも、いつでも出られるように準備をしておくよう伝えてくれたまえ」
機体のジェネレーターに火が入る。まるで猛獣の唸り声のように、それは静かな砂漠に響き、夜風に吸い込まれていった。

――ＴＭＦ／Ａ―８０２　バクゥ。
足元の安定しない砂漠戦をメインとして、脚部重量を分散できる四足歩行型で開発がなされた、ザフトの局地戦用最新型モビルスーツである。四足歩行と脚部の無限軌道（キャタピラ）を使い分けることにより、砂地では他の追随を許さない無類の機動性を発揮する。
背部には、四〇〇ミリ１３連装ミサイルポッドか、四五〇ミリ２連装レールガンを選択して取り付けができ、火器もその当時最新鋭のものを搭載している。

灼熱の大地を駆けまわり、敵を屠るその姿は、まさに砂漠の獣。
この機体に出会ったが最後、敵は無残にも、その食い荒らされたかのごとき屍を、灼熱の砂に埋めることになるのである。

◇　◇　◇

時間は少し巻き戻り、一九〇〇。
『キャリー・ベースから暗号通信……どうやら、あちらは『明けの砂漠』との接触に成功したようですわね』
「そうですか……作戦の第一段階はクリア、と言ったところでしょう」
キリシマからの報告を聞いて、マリアはふう、と安堵の息を吐いた。しかし、モビルスーツのコクピットに座ったまま、もうすぐ半日余りになろうとしている。安心こそすれ、マリアの心中は複雑であった。
「ゲリラ『明けの砂漠』……中東の砂漠地帯を拠点とする武装組織。『砂漠の虎』に対抗してゲリラ戦を展開中。しかし、構成員の大半は少

年兵が占める、と」
「……モビルスーツパイロットの私たちが言えたことではありませんが、少し心配ですね」
マリアの溜息交じりのつぶやきにエターナも同意する。
「ええ、それに、何よりの懸念は……」
言いつつも、マリアの懸念は全く別のところにあった。この世界に降り立った時から、彼女の胸中には言いようのない不安とざわつきが渦巻いていたからだ。
『……この世界は、もう既に歪み始めているかもしれない。そう言いたいのですね、マリアさんは』
「……ええ、そうかもしれません」
明確に回答することはできなかったが、エターナの推測はほぼ当たっていた。それこそ、自分たちがここにいなければならない理由など、今はそれしか思い当たるものがないともいえた。
「……」
マリアは視線を夜空に向けたまま、その心配ばかりを考えていた。
『大丈夫だよ、マリア姉さん』
通信から聞こえてきたのはシェルドの声だった。
『僕たちは、今までの戦いも潜りぬけてこられたんだ。今度だって、きっとうまくいくよ』
自信の根拠は全く持って不明な言葉であったが、マリアはなぜかその言葉を聞いて、胸に渦巻く靄が不意に晴れた気がした。
「……ええ、そうね、その通りかもしれないわ、シェルド」
何故かはわからないが、彼の言葉には不思議と不安を覚えなくなる。いつもマリアはそんな気がしていたのだ。
「……行きましょう。私たちも、すべきことをしなければ」
コンソールのメインスイッチを押す。ジェネレーターに火が入り、ガスタービンの独特な唸り声をあげて、機体はゆっくりと砂地を踏みしめ大地に立つ。

特徴的な1つ目のモノアイに光が灯り、4機のモビルスーツは砂漠の宵闇に紛れ、静かにその歩を進め始めた。

ＴＭＦ／Ｓ―３　ジンオーカー。

砂に紛れる茶色系の機体色に、機体各所に施されたフィルターや、大気圏下での熱対流に対応したセンサー類は、砂漠専用機であることを思わせる。それも何を隠そう、この機体こそ、第八艦隊をその手で蹂躙したＺＧＭＦ―１０１７　ジンの砂漠対応型カスタムタイプだからである。宙間戦闘用の装備を廃し、代わりに発動機や火器は大気圏用に専用のカスタムを加えたものが装備されている。

この世界の歪みを正すため、この世界最強の兵器であるモビルスーツの選択肢の中から、ジェネレーション・システムに繋がる端末が導き出した最初の結論。

――――『砂漠の虎』の牙を折れ。

すなわち、アンドリュー・バルトフェルドを撃墜することで、歪む以前の正しいワールドデータに修正が可能である、とシステムは明言したのだ。

その任務を忠実かつ確実に遂行するため、システムによって用意された機体こそ、宇宙・地上問わず活動できる万能の兵器モビルスーツ。

この世界、コズミック・イラで最初に実用化された始祖の機体こそジンであり、この世界で最も確実に作戦を遂行し得る可能性のある機体であると同時に、データさえ用意できればあらゆるモビルスーツを用意できるジェネレーション・システムのビルドシステムにとって最も好都合な、あらゆる機体への発展可能性を秘める原初の機種である。

斥候として先行したセカンドチームは、現地のエージェントからの協力を得て機体を砂漠用装備に改修したのがつい2日前のことであ

る。
キャリー・ベースから持ち込んだトルネードガンダムを使うことも考えたが、あくまでも汎用機であるトルネードよりは、極地戦闘特化のカスタム機を用意するほうが、砂漠戦では安定すると考えたマリアの提案により、あらかじめキャリー・ベースで用意していた３機のジンを改修したものに、現地で撃破された機体を修復した１機を加え、なんとか砂漠戦に必要な装備を揃えることができたのである。
セカンドチームの装備はジンと同じＭＭＩ―Ｍ８Ａ３　七六ミリ口径重突撃機銃とＭＡ―Ｍ３　重斬刀を基本に、パイロットの得意分野に合わせ、マリア機とエターナ機には、射撃の精密性を重視したＭＭＩ―ＸＭ１７　試製三七・五ミリ超高初速ライフル、操縦技術の未発達な部分のあるシェルド機には、攻撃範囲に優れたＭ６８キャットウス　五〇〇ミリ無反動砲を、キリシマ機は武装の取り回しを重視するためＭ６８パルデュス　脚部三連装短距離誘導弾発射筒を追加装備した。
マリアはすべてが問題なく稼働していることを示すコンソールの表示を一通り確認した後、小さく息を吸い、そして回線をオープンして宣言する。
「……セカンドチーム、これよりミッション・ファーストフェイズに入ります」

II. 醒めぬ剣

「ようこそ、『明けの砂漠』へ。サイーブ・アシュマンだ」
「ジョニー・ライデンだ。しばらくの間、世話になるぜ」
「同じくシン・マツナガだ。彼ともども、暫しの間よろしく頼む」
　ゲリラの基地に到着したジョニーとマツナガを出迎えたのは、サイーブと名乗る壮年の男だった。角ばった顔に深いひげをたくわえ、頬には深い傷跡が残っている。
「早速で悪いが、情報を交換したい、サイーブ殿。今の状況を教えてはもらえまいか」
「ああ、元からそのつもりだ。地球軍もザフトも気に食わん連中ばかりだが、あんたたちになら教えてやってもいい」
「なに？」
　サイーブの含みのある発言に、思わずジョニーは握手しようと出した手を止めてしまった。
「正規の軍はだめで、俺たちならいいってのかい？」
　ジョニーやマツナガも、ニキから説明を受けただけではあるが、この時代のおおよその対立の構図は知っていた。すなわち、地球を至上とするナチュラルによる地球連合軍と、宇宙で独立をもくろむ遺伝子操作による新人類コーディネーターを擁するプラントの独立部隊ザフトである。
　普通に考えれば、ここは地球軍の領地であり、地球軍によって砂漠の虎すなわちザフトに対しては防衛を行っているように思うものだ。
「ああ、このアフリカは、もともとどちらかといえばザフト寄りでな」
「そうなのか？」
「もっとも、ザフトに与した方が得なんて大っぴらには言えねえし、言ったら言ったで地球軍からは目の敵にされちまう。最終的には服従か鎮圧か、どっちに進んでもいいことはないがな」
「……」
「つい2日半前に、ビクトリア宇宙港がザフトに落とされたばかりだ。地球軍の奴ら、奪還作戦をするのかと思ったら、早々にアフリカを見

捨ててトンズラしちまった」
「……なるほどな、あちらさんからすれば、あんたらは別になくても困らない程度のものって訳か」
「おそらくはな。あれからの地球軍の動きといえば、同じ日に宇宙から落っこちてきた、あの新型の戦闘艦ぐらいだ」
「っと、それだ、俺たちが知りたいのは」
「ん？　あのアークエンジェルって艦の情報もか？　なんでだ？」
「詳しいことはこれから話すが、取り敢えずはあちらにも我々の味方が向かっているのだよ。故に、不測の事態にだけはならぬように、な」
　一瞬なんと言ったものかジョニーは答えに窮しかけたが、マツナガがあらかじめ答えを用意していたと見えて、横からフォローを入れた。ジョニーは表情に出さなかったが、内心ほっとしていた。
「なるほどな、だいたい理解できたぜ、あんたらがどういう組織かってのは。だったらなおさら教えてやらなくちゃあな」
「……すまねえな、恩に着るぜ」
「礼をするのは俺たちの方だ。俺たちからすりゃザフトも地球軍も、支配と略奪ばかりで同じにしか見えねえからな。情報の対価だけで心強い援軍が得られるんなら、あるだけいくらでもくれてやるさ」
「感謝する。そこでだが、まずその艦には戦力と呼ばれるものはあるのか？」
　マツナガはさっそく話題を切り出す。
「戦力というか、あの艦自体が最新技術の塊と聞いているぞ。少なくとも、性能だけならザフトの艦を上回っているって話だ」
「その言い方だと、不確定要素が多いように聞こえるが？」
「俺たちにも判断しかねるのさ。２日前に、あの艦が降りてくる直前に、軌道上で戦闘が発生してな。護衛していた艦隊は全滅したが、あの艦だけは地上に降りてきたってわけだ。最新鋭の戦艦なら何とでもなりそうなもんなんだが……」
「ふむ……」
　そこまで聞いたとき、マツナガはわずかに引っ掛かりを覚える。そしてそれは横のジョニーも一緒だったようで、マツナガと同じ顔をし

ていた。
「貴官も引っかかるか？」
「ああ、同じくな。言葉にできねえが、どこかでそんな話を聞いたことがあるような気がするんだ」
もどかしい顔をしながら、ジョニーは頭をかいた。二人は、全く知らない世界の話であるはずなのに、何か得体のしれない既視感のようなものを覚えていたのだ。
「まあ、心配はいらねえ。実態はそのうち明らかになるだろうさ」
「なんだって？」
「このまま、砂漠の虎が黙っているわけがねえ、ってことだ。俺の勘が正しけりゃ、「虎」は数日以内にあの艦に攻撃を仕掛けるだろう」

◇　◇　◇

「見えた……あれが、アークエンジェル……」
同じころ、マリア・オーエンス率いるセカンドチームは、その艦、アークエンジェルへ接触するため移動していた。
彼女らの目に飛び込んできたのは、全身を白亜に染め、前にせり出した対のカタパルトデッキと、天使の羽のごとき尾翼を兼ね備えた、見たことのないような美しい戦艦であった。
しかし、その姿に見惚れる間もなく、エターナとキリシマは妙な胸騒ぎを覚えていた。
「噂に違わず、美しい艦ですこと。とはいえ、妙に嫌な予感がするのは何故なんですの……？」
「……私も同意見です、キリシマさん」
二人には、なぜかこの艦が、この世界の何かをおかしくさせている、という直感のような感覚があったのだ。しかし、それが何を根拠にそう思えるか、二人は言葉では言い表すことができなかった。
「艦からの許可がありました。皆さん、カタパルトデッキへの着艦準備を」
アークエンジェルからの許可を受け取ったマリアが、無線で全員に

そのことを知らせた。光学センサーが誘導ビーコンを受信し、自動で機体を着地姿勢にさせる。右側のカタパルトデッキの扉がゆっくりと上昇し、中で整備員が誘導灯を振っているのが目に入ってきた。
「……」
キャリー・ベースより三割は広いカタパルトデッキに足をつける。最初は敵対する勢力のモビルスーツでうまく接触できるかと誰もが心配していたものの、フタを開けてみればここまですんなり進んだことは意外だった。
機体はコクピットハッチを開くと同時に、オートで腕部マニピュレーターを作動させ、パイロットをその掌に載せて地上へ下す。しかし、安堵を遮る金属音……銃を構える音が格納庫に響いたのは、四人がモビルスーツから降りた直後のことだった。
「動くな!!」
女性の士官がふたり、銃を構えて四人を見据えていた。その後ろにメンテナンスクルーと思しき男たちが数人。叫び声が耳に入ったと同時に、四人は戦士としての条件反射で手を上げる。
「セカンドチーム、というのは、あなたたちのこと?」
質問を投げかけてきたのはもう一人の女性士官だった。背は低かったが、少々ウェーブがかかった柔らかな栗色の長髪で、見た目は物腰の優しそうな人物にも見えた。
「ええ、そうです。マリア・オーエンスです」
「同じく、フローレンス・キリシマと申します。貴女方は、私どものことをご存じなのではありませんこと? 来て早々、銃を向けられるのは少々心外ですわ」
「……地球に降下できた直後に、匿名で通信があったのだ。補充戦力が到着するから、迎え入れろとな」
最初に叫んできた女性士官が答える。細く吊り上がった目に、黒髪をショートに切りそろえ、隣の女性より少し背が高かった。いかにも軍人向きという出で立ちではある。
「我々にとって戦力の補充はありがたいが、まさかその補充がジンとは予想外だったからな。念のためこうしているまでだ」

確かにもっともではあった。むしろうまく行き過ぎたというべきか。敵として嫌ほど見た機体が自分たちの勘に乗り込んでくるというのだから、恐ろしいことではある。
「……確かに、地球軍はまだモビルスーツの開発には至っていませんでしたわね。戦力として運用するならば、敵側のモビルスーツでも、喉から手が出るほど欲しがっていらっしゃると思っていたのですが」
「そうだな、パイロットともども、戦力の補充はありがたい。だが、ザフトの勢力圏内で、ザフトのモビルスーツにも縋り付くほど、我々も見境がないわけではないからな。当然の予防策を取ったまでのことだ」
「冷静に考えてみればそうですわね。浅慮でしたわ……とにかく、銃を下ろしてくださいませんこと？　これではまともに話もできないではありませんの」
「なら、まずはこちらも確かめたいことがある。艦長室まで同行願いたい」
「……」
マリアが三人に無言で目線を送り、三人もそれに頷く。格納庫の四方八方から好奇と恐怖と疑惑の混じった目線を向けられているのがわかったが、四人ともそれにはあえて気づかないふりをしたまま、二人の女性に付いて行くことにした。

◇　◇　◇

結論から言うと、サイーブという男の勘は的中した。「明けの砂漠」と合流してから半日も経たないうちに、ザフト軍に動きがあったのだ。
戦力は砂漠対応の地上戦艦3隻と、四足歩行型モビルスーツ『バクゥ』が少なくとも6機、更に砲撃型支援モビルスーツ『ザウート』が数機である。数でいえばそれほどの規模ではなかったが、何より砂漠戦に特化した機動兵器ぞろいの部隊だった。
そして、さらに悪いことには、その部隊の向かうであろう先はアー

クエンジェルの降下地点。彼らはまだ知らぬことではあったが、迎撃できる機動兵器を持たない、今まさに丸腰の大天使を狙って、砂漠の獣の群れが、一斉に襲いかかろうとしているのであった。
「明けの砂漠」はすぐさま行動を開始した。地対空ミサイルを装備した砂漠用のジープを中心に、ロケットランチャーや対戦車用地雷など、考えうる限りの対機動兵器用武装を手に、アークエンジェル防衛のため飛び出していった。
そして、ジョニーとマツナガの二人も、モビルスーツを駆りそれに同行する。
宇宙という場所で生まれた戦艦にとれば未知の領域であるし、砂漠というのは足場の不安定さや地面から発せられる熱対流が、機体のパラメータを容赦なく狂わせる場所である。ゆえに汎用機にとれば不得手な環境であり、事実、二人は昼間との外気温の違いから生ずる環境パラメーターの違いに戸惑うしかなかった。
「くそっ、右足関節のアポジモーターの動きが硬い……潤滑油が冷え固まってるぜ」
「こちらも、左足のスラスターの出力が６％落ちている……やはり、コロニー内の戦闘とは些か以上に勝手が違うようだな」
温暖なコロニーから寒暖の差が激しい地球圏環境へいきなり放り出され、二人のモビルスーツは、当然のごとく駆体の節々から悲鳴を上げ始めたのである。
「予測ではもうすぐ件の艦がザフト軍と会敵する時間だな。もう片方のスラスター推力を絞ってバランスを取るしかなさそうだが、これで間に合うかどうか……」
マツナガは無事なもう片方の足のスラスター推力を弱めて推進剤のバランスをとることにし、コンソールをたたいて出力を絞る。
「精々、その艦の直擁機がそれまで持ち堪えてくれることを祈るしかないな」
『大丈夫だ、あの艦も、搭載されているモビルスーツも、そんなにヤワじゃないぞ』
「なに？」

通信に割り込んできたのは女の声。二人の足元を付いてくる車のレジスタンスメンバーからのものだった。声の主は、先頭を走る車の助手席、金髪のショートヘアに吊り目の鋭い顔つきをした少女。その名をカガリ・ユラといった。
「お前さん、そのアークエンジェル……といったか、そこのモビルスーツを見たことがあるのか？」
『ああ、少し前にロールアウトするところを、偶然な』
ほんの一瞬、少女の声が陰ったが、誰もそれに気づくことはなかった。
「そういえば、我々も機体の情報をまだ聞いていなかったな。問題なければ貴殿の口から教えてはくれまいか？」
『わかった、私も、全ての情報を知っているわけじゃないが、教えてやる』
星が輝く空に、流れ星が一筋、流れて行った。

◇　◇　◇

「改めて、このアークエンジェルの艦長を務めています、マリュー・ラミアスです。手荒な歓迎をして、悪かったわね」
「副長のナタル・バジルールだ。先ほどは他のクルーの手前、ああするしかなかった。いきなりの非礼、お詫びしたい」
艦長室に入るなり、二人は打って変わって態度を軟化させた。どうやら、先ほどは格納庫にいた多くのクルーたちを不安にさせないため、あえて強気に出ていたようだ。
「いえ、此方の事情が伝わっていたのなら、それで問題はありませんわ。では――――」
「本日〇〇三〇をもって、マリア・オーエンス、フローレンス・キリシマ、エターナ・フレイル、シェルド・フォーリー、計四名、地球連合軍強襲揚陸艦アークエンジェルへの着任許可を願います」
「許可します。扱いとしてはあくまでも現地協力者だけれど、今の私たちにとっては、正直を言えば戦力はひとりでも多いほうがいいわ」

「……ひとつよろしくて？　この艦の直擁機は、私たちの掴んでいる情報通りなら、ザフトの量産機程度、余裕で撃破できるスペックをお持ちだったのではありませんこと？」
「えっ？」
　マリューが目を丸くした。驚きはもっともである。なにせ、彼女から見れば、キリシマはあくまでもいち民間人である。それを、軍の機密たるモビルスーツの情報を掴んでいるとなれば、驚くなという方が無理な話であった。
「……ええ、その通りよ。けど、なぜ貴女がそれを？」
「デュエイン・ハルバートンの伝手で、少しプロジェクトに協力をさせていただいただけですわ。まあ、正直なことを申し上げれば、いつか交渉材料として使うために念のため握っておいた、というところでございますが」
「……言いたいことはあるが、この際それは置いておこう。機体の性能の話だったな」
　ナタルがそれた話題を戻し、制帽の下から、その切れ長の瞳をのぞかせて言った。
「結論から言えば、性能的に勝っているのは事実だ。だが、今の我々には、あの機体のスペックを十全に発揮できるだけのパイロットが居ないのが現実なんだ」
「どういうことです？」
　今度はマリアが疑問符を浮かべたが、ナタルがすぐに付け足した。
「いや、いないという言い方は少し語弊があるか……いるにはいるが、動ける状態にない、と言うべきだな」
　言いながら、ナタルは抱えていた書類の束から、一枚の紙を抜き出し、マリアに手渡した。
「……これは？」
「あの機体……Ｘ１０５ストライクの、パイロットだ」
「！」
　その一言で、マリア以外の３人が慌てて同時にその書類を覗き込んだ。

書類には、一人の少年の個人データが事細かに書かれている。
キラ・ヤマト。それが少年の名前であった。
添付された写真の彼はまだ幼さを残した顔立ちであったが、マリューの話によれば、モビルスーツの操縦ＯＳの基礎プログラムを一瞬で構築できるだけの、優れた情報処理能力とプログラミング技能を持つということだった。
一瞬全員がさらに疑問符を生じさせたが、書類に書かれていたひとつの事実を見て、その疑問は一瞬で氷解した。
普通の人間では成し得ない、短時間でのプログラム構築。
先天的に遺伝子操作で優れた能力を生まれつき持っている人種。
地球連合と対立するプラントの住民であるコーディネイターであるからこそ、彼は常人離れしたそれを可能にしたのだ。
そして、マリューの口から告げられたのは、先行き不透明なこの艦の現実。
ザフト軍の追撃からアークエンジェルを守ってきたその少年、キラ・ヤマトが倒れたという事実だった。
「いくら彼がコーディネイターと言えど、モビルスーツ単体での大気圏突入は無茶が過ぎたのだろうな。突入自体を無傷で成功させたのはいいが、それからずっと、意識は戻らないままだ」
「他のパイロットを充てようにも、彼が組み上げたＯＳは高精度過ぎて、ナチュラルに対応させるには時間がかかるのよ。正直、第８艦隊の犠牲を、ここで無駄にしたくはないのだけど……」
マリューもナタルも、その表情は重かった。すぐそこにガンダムという最強無比の機体があるにもかかわらず、誰一人としてそれを御せる者がいないのである。宝の持ち腐れとは、まさにこのことだった。
「単方向の分散型神経接続によって自律機動をおこなう汎用統合性システム」

コズミック・イラにおいて、このＯＳを保有する機体こそ、そのシステムの名称の頭文字をとってすなわちガンダムである。モビルスーツ生産を行っているプラントですら、最近になって製造ラインが軌道に乗ったばかりで、地球連合軍ではまだ宇宙用モビルアーマーや戦車が大半というありさまだった。

そんな中で、地球連合軍が極秘に他国からの技術供与を受けて製造した５機のモビルスーツ。それこそがこの「ガンダム」と呼べるＯＳを搭載した機体であり、ザフトのモビルスーツよりも数段上の性能を持つ、地球連合軍の切り札となるはずであった。

しかし、そもモビルスーツの基礎理論すら完成していない地球連合では、機動プログラムの完成度はお粗末というほかなく、モビルスーツを危なっかしく歩行させるのが精一杯。

数奇な運命の巡りあわせによってその場に居合わせたキラ・ヤマトが倒れたのは、持ち前の能力で十数秒でパラメータを書き換え、漸くザフト製モビルスーツと渡り合えるようになった矢先の出来事だった。乱暴な言い方をすれば、凡人であるナチュラルが、非凡人であるコーディネーターの組み上げたＯＳで動く機体を操縦するのは、不可能ではないがとてつもない訓練量を必要とするレベルだったのである。

「……そのモビルスーツについては、後で我々のメカニックに見せることはできますか？」

マリアがふと口を開く。

「手だてがあるというのか？」

「１００パーセント、という保証はできませんが、一応それなりにモビルスーツには精通している人間ですから、手も足も出ない、とはならないと思います」

マリアのその一言は、ケイを信頼しているからこそ出るものだった。

「……確かに、貴官らの機体をカスタムしたメカニックなら、何かできそうだな……わかった、その点は、整備班に手回ししておく」

「ありがとうございます。それで、この艦は今からどこへ？」

「北米アラスカ。地球連合軍本部だ。とはいっても、ここからでは最短で五日、というところだろう」
「わかりました。私たちの母艦は、トロント上空で待機するように要請しておきますから、後々合流することにしましょう」
「そうね。今は少しでも動ける味方が欲しいわ。補充の戦闘機は届く予定だけど、モビルスーツは今の地球連合軍には無いものね」
「そちらの機体も、後でアークエンジェルのデータベースに登録をしておくとして、今はまず、今後の作戦を考えなければな」
ナタルは制帽をかぶり直しながらそう言った。

◇　◇　◇

「なるほど、モビルスーツ初のビーム兵器に、実弾ダメージを軽減するフェイズシフト装甲……なかなかの代物を作り上げたもんだな、地球連合さんとやらは」
カガリからひと通り「ストライク」なるモビルスーツの話を聞かされたジョニーは、ただ呆れるほかなかった。カガリが「ヤワじゃない」と表現したそれは、この世界における最新技術の塊であった。それも、自分たちのモビルスーツが霞んで見えかけるほどの。
「まったく、『白い悪魔』なんて、よく言えてたもんだ。こんなんじゃ、あっちの奴の方がまだ優しく見えるぜ」
溜息を隠そうともしないジョニーに、マツナガが笑いながら声をかける。
「まだ戦ってもいない先から気をもむとは、真紅の稲妻らしくないのではないか？」
「やめてくれ。エースパイロットと言ったって、挑むべき敵を間違えるなんて有り得ねえよ。そういうのは勇気じゃなくて無謀ってんだぜ」
ジョニーは勘弁してくれという口ぶりだった。
「ルウムの時のあの高揚感が嘘みたいだぜ……操縦桿を握る手がこうまで竦むなんて、俺はどうしちまったんだ」

ジョニーは小さな声で誰にも聞こえないようにつぶやいた。高揚ではない、恐怖でもない。えも言われえぬ感情が、真紅の稲妻の手を少しだけ、しかし確かに震わせていたのだ。
「……ん、レーダーに機影……奴さん、いよいよ姿を現したな」
「熱源8、うち大きいものが3つ……これはモビルスーツか。それに護衛の戦車かヘリがいるというところだろう」
「2対3か……くそ、勘が戻りきってないってのに、なかなかきついぜ」
「恐れることはない、ゲルググのポテンシャルを信じれば、勝機は十二分にある……来るぞ！」
マツナガが言うが早いか、正面から小型ミサイルが蜂のように向かってきた。
「バクゥって奴か！」
ミサイルの熱量に紛れて接近してくる影。青紫色の四つ足、ヒト型の機体にはない長い首。間違いなく、バクゥであった。
「こちらにも守るべきものがある……貴公らに恨みはないが、墜とさせてもらう！」
マツナガ機のビームマシンガンが唸りをあげ、機銃のごとく放たれたビームが瞬く。凍てつく砂漠の静寂を、爆発音が、夜空にあがった花火のように破った。
「そこだ！」
続けて接近するバクゥに狙いを定める。あくまでも対狙撃用として開発されたビームマシンガンである。そのガンスコープに映るものは間違いなかった筈だった。
しかし、バクゥは最小限の動きで、まるで犬が「伏せ」をするかのごとく身をかがめる。同時に、今までよりも明らかに砂の上を移動する速度が上昇した。
命中するはずだったビームは、むなしく地に落ち砂煙を上げただけだった。
「なにっ!?」
マツナガもトリガーを引きながら機体を追う。しかし、機動性では

互角以上の筈なのに、ビームが追い付けないのである。
「速い……くっ！」
どうにか捉えられると思った矢先に、背後から砲撃の弾が飛んできて、マツナガは回避せざるを得なかった。長距離砲撃機であるザウートの肩部キャノンは、確実にゲルググのレンジ外から当てにきていると、マツナガは同時に確信した。
「ええい！」
「俺がやる！　遠距離はそっちの機体のほうが得意だろ！」
「すまぬ！」
ジョニーの足は、そう言う前にすでにスラスターを踏み込んでいた。
「真紅の稲妻に機動力勝負か。受けて立つぜ！」
ビームライフルは、今度は正確にバクゥをとらえていた。
「そこだ！」
ビームマシンガン以上の初速で放たれた一本の光線は、直撃とはいかなかったが、1機のバクゥの背に乗るミサイルポッドを貫き、爆散させる。
「そいつがなきゃ、牽制はできないだろ！」
すかさず別のバクゥが援護に入る。ビーム兵器が減衰しやすい大気がある地球上では、ビームより実弾兵器の方が有利であるはずなのだが、ジョニーの狙いの正確さに、パイロットに明らかに動揺が走っている動きだった。
「次はお前さんだ！」
ジョニーは2機目のバクゥに狙いを定めた。しかし、何発かのビームが放たれたが、今度は装甲表面にかすっただけだった。
射撃戦の実力では分が悪いと見るや、すぐさまバクゥは近距離戦を挑んできた。出力を最大まで引き上げ、その脚部にある無限軌道でもって、体当たりを仕掛けてきたのだ。
「ちぃ！」
ジョニーはとっさに盾を構える。装甲同士が激しくこすれあい火花が散った。直後に、先ほどミサイルポッドを破壊されたもう1機の

バクゥが、ジョニーの死角から急襲する。
「ぐっ！」
背部に体当たりをまともに食らい、ジョニー機のコクピットが激しく揺さぶられる。一瞬視界が白く染まったが、ジョニーはスラスターを踏み込み、転倒だけは避けるべく体勢を立て直しにかかる。
「なんて装甲だよ！　ゲルググに傷をつけるとは！」
足元では「明けの砂漠」のメンバーが、持てる限りの火力を駆使し、バクゥに少しでもダメージを与えるべく奮戦していた。しかし、もとよりゲルググのコクピットを揺さぶるほどの装甲である。携行兵器程度では蚊に刺された程度のダメージしかないのは明白だった。
「深追いはよせ！　モビルスーツの相手はモビルスーツがやる！」
バクゥは車を見つけるなり、虫を踏みつぶそうとするかのように接近してくる。気を取られるあまり、モノアイの視線がゲルググから外れたのを、ジョニーは見逃さなかった。
「その機動性が！」
バックスカートに懸架されたビームナギナタを手に取る。
「命取りだ！」
そのまま、ビームナギナタを灼熱の砂めがけて投げつけた。直後、気づいたバクゥは回避を取ったがすでに遅く、次の瞬間、砂から突き立ったビームの刃に左の足を2本とも無限軌道ごともぎ取られていた。
半身をこすりつけ、派手な砂煙を上げてバクゥは転倒した。いかに四足とはいえ、もはやこうなってはリカバリーの域を超えていることは明白だった。
砂煙が収まった時、そこには腹部を上にしたバクゥの姿があった。獣が腹を見せること、即ちそれは成すすべなしという白旗の証である。
こうなれば、もはや恐れるに足るものではなかった。
ジェネレーターにビームライフルの直撃を食らい、四足の獣は爆散した。